――『お陽さま這入つても穴の中、』

――『よいしよ。』

――『アー、くるくる廻つて日が暮れた。』

――『どつこいな。』

歌がやむと、二人の男は鑿と槌とを投げ出してギロリと計介の方を振り返つた。彼は卷尺の端を穴の先端へ當てさせ、その月初の進行起點まで卷尺を曳き延ばした。

『十六尺三寸、』と彼は目盛を讀み上げた。

『すると、どうなりますかね？』

『九寸三分の進行だ。』

『石が惡いんだ。』と默つてゐた男が不平さうに横から云つた。

計介は卷尺を卷きながらも男達の樣子に絶えず注意をはらつてゐた。お熊は兩足をふん張つて轉げてゐる石塊を胸に抱き上げた。と、どつとトロ箱の中へ投げ込んだ。計介の卷いてゐる鋼鐵の卷尺だけは、岩を擦つてささやかな流れのやうな物優しい音を立ててゐた。

『お熊、今夜は誰と寢る番ぢや？』と太つた男が云つた。

『お前とぢや。』

と、お熊は浴びせると、「そら來た。」と掛け聲もろともまた一つの岩塊を、男を抱くやうに抱き上げた。

男はにやにや笑ひながら蠟燭のやうなダイナマイトを横に喰はへた。ダイナマイトの影は、横に大きく彼の口を斬り下げて怒り出した。彼は雷管へ導火線を差し總ると、それをまた喰はへてゐるダイナマイトの中へ突き込んだ。

『おい、お熊、うろうろしてゐると、どてつ腹へ風穴通してやるぞ。』

計介はその男の言葉が自分に向つて投げつけられたのだと云ふこと位は分つてゐた。彼は出口の方へ歩き出した。と、彼の後でもうダイナマイトの導火線が火花を吹き出しながら岩の中へ撚え込んでゐた。後から、人影が岩壁の上へ折れ重なつたまま殺到して來た。彼はピストルを壓え

て出口の方へ駈け出した。

三

計介は九號を濟ますと十號の穴へ來た。穴は峽谷の一方の岩壁に添つて二十二ケ所に掘られてゐた。此の二十二ケ所の穴は全線一里に渡る街までのトンネルをやがて一直線に連結しやうとする小口の穴である。

十號の穴の中では、白衣を着た三人の朝鮮人が、水の中に浸つたまゝ默々として岩を掘つてゐた。計介はその黑い岩と對面しながら金槌のやうに何事も考へてゐなささうな彼らを後ろから見てゐると憂鬱になつて來た。此れは確に世の中で最も同情されるべき存在だ。その絕えず默つて見てゐるものは黑色である。その黑色の中で蓬蓬と鳥のやうに髮を延ばした彼らは一體何を考へてゐるのか、と彼は考へた。「しかし、俺の方は危いんだ。俺は殺されようとしてゐる。俺は殺されるべき理屈を發見されたのだ。此の理屈が俺を絕えず追つ駈け廻してゐるではないか。』

彼は進行を許り終ると直ぐ十號の穴から外へ出て來た。――『俺を守つてくれるものは何もない。たゞ一本、引金を引く俺の人差指だけだ。これだ。』と彼は人差指を出して見た。

彼は此の危險な仕事をしてゐる自分の家から逃げ出すことが出來なかつた。もし彼が此の危險の中に踏みとまつてゐるなら父と妹はそれだけ助かるにちがひないのだ。いつか前に、彼は坑夫頭の瀧川が代表となつて、父の所へ要求を持ち出しに來た五六回目の夜であつた。計介はその後で父に坑夫達の要求のまゝ單價を上げてはどうかと奬めたことがある。すると父はいきなり傍の記入簿を開けて彼に云つた。

『わしは資本家ぢやないのだぜ。資本家は市役所だ。あの街全體が資本家だ。わしの入札して落した額は、どんなことがあらうとも絕對に動かすことが出來ないんだ。もし今坑夫達の要求の通り單價の一割を値上げるとする。するとだ、良いか、わしの利益は一日平均たつた六十圓だ。』

『そんなにあればいいですな。』と彼は云つた。

『うむ、良い。しかし、お前はまだまだこれから物價が騰ると云ふことを考へてゐないのだ。』

『物價が騰れば坑夫達の諸式も高くなるでせう。さうしたらなほ單價を上げてやらなきア。』

『それは誰でもさう思ふ。それでわしは困るのだ。米や味噌が上るとまた單價を上げよと云つて來る。もしわしが坑夫の單價を上げるとする。するとわしの損はそれだけぢや濟まないのだ。それだけの損ならわしは我慢をするつもりだ。所が、わしの方ではわしの家の味噌や醬油である火藥や鐵やコンクリートや煉瓦の高くなる損まで引き受けねばならんのだ。此の損はわしはどこへも持つて行き場がないのだよ。もし持つて行き場があるなら、上げよと云ふ坑夫の單價を、こちらから下げよと云ふより仕方がない。しかし、いまわしが上げる代りに下げたとする。すると、後は云はないでも分るだらう。所が、いま物價がずんずん上つてゐる。まだまだ上るにちがひないのだ。』

『ぢや、結局工事を投げ出すより仕方がないぢやないですか。』と彼は云つた。

『うむ、そりや物價次第だ。』と父は答へた。

『物價がトンネルを掘つてゐると云ふんですか。』

『さうだよさうだよ。しかし、わしは一つ鑿岩機を買はふかと思つてゐる。これを一臺買へば三十人の坑夫が要らなくなる。いくら物價が高くなつても機械は單價を上げてくれとは云はないからの。』

『しかし、そんなことをするならもつと初めからしなければ。』

『そこだて、だから坑夫の知らない間にこつそり買ふんだ。知らして了へば何をし出すかしれないからな。』――

計介はいま彼の家で秘密にその鑿岩機を注文してあることを思ひ出した。一臺の鑿岩機が三十人の人間の愛慾と食慾とを奪ひ上げる。その結果は？　彼はそれを豫想することが出來なかつた。しかも事實は日日その結果の方へ進んでゐる。彼は枕木の上を歩きながら、絶えず大きな賭博を打つてゐるやうな氣がして來た。

四

計介は首條へ流れ込む霧を防ぐために上着の襟を立てて歩いた。石斛の花を全身に咲かせた岩層が霧の中に反りを打つて延び出てゐた。

譬へば今五人の男が不意に兇器を持つてあの岩の角から現れたとする。すると、俺はどうすれば良いか。――彼はその岩層の向ふに折れ込んでゐる霧に埋つた見えない路が不安になつた。路はトロツコのレールと人道とを兼ねた幅三尺程の路である。頭の上は十數丈の絶壁で足の下は數百尺の斷崖だ。ここで挾み打ちに合はされれば一挺のピストルで間に合ふか。これが彼のいつもの最後の問題である。

彼はその最後のときの練習のために、石斛の花の描いた白い曲線の下部を狙つてピストルを差し向ける姿勢をとりながら、岩角の先端へ身を現した。すると、茫々とした霧の中から、ダイナマイトの箱が徐々に押されながら浮んで來た。それは街から今日、計介の家へ着く筈の荷物である。家には火藥のことは分らない妹がただ一人ゐたのを彼は思ひ出した。

彼は暫くそこに立つてゐてから重さうにダイナマイトを押して來る二人の人夫の後について引き返した。人夫は計介の家の前まで來るとトロ箱から荷を降ろして擔ぎ出した。ダイナマイトは二人の肩の上に竝んだまま、岩間の間を默々として動いていつた。二層の莊嚴な峽谷の胸はその小さな物體を見下して靜まつてゐた。だが、今はダイナマイトは默つてゐた。

計介が勝手口から早廻りして家へ這入ると、妹は周章てて袂の中へ紙片を押し込んだ。

『一人かい？』

『ええ。』

『誰か來たか？』

『いいえ。』

『父さんは？』

『まだよ。』

妹は彼に脊を向けて答へると青くなつたまま直ぐバイオリンを彈き始めた。ふと彼はいま誰かに忍び込まれて接吻された所ではないかと思つた。彼は立つたまま變化する妹の耳の色を見詰め

てゐた。

慄へ上るバイオリンの音に迎へられてダイナマイトが這入つて來た。彼は人夫の差し出した傳票に印を濟ますと記入簿へ書き入れた。

『雷管三百個、導火線三百條、ダイナマイト三百本、十三號へは十五個行き過ぎ。』

此の行き過ぎ十五個のダイナマイトの用途は計介にとつて疑問であつた。凡そ一日の工事の進行度合とダイナマイトの使用量とは比例すべきが原則である。しかるに十三號の進行度合は、その部面の岩質の硬度と比較してさへも、ダイナマイトの使用量は多過すぎる。此のダイナマイト使用統計表に狂ひの現れた部分には、常に何らかの生活的な興奮が、密かにそのメートルを上げてゐると見らるべき素質があつた。

計介は「瀧川飯場、十三號」と云ふ箇所に警戒の線を引いた。この飯場には確に前から無用のダイナマイトを蓄積してゐる者が潜んでゐた。少なくとも今迄の統計表に現れてゐる限りに於ては、百本のダイナマイトが默つて誰かの懐中に隱れたまゝうろついてゐる。計介は自分を狙つてどこからともなく忍びよるその百本のダイナマイトの無氣味な沈默を嗅ぎつけると寒くなつた。しかし、間もなく妹のバイオリンは霧の中でラ・パロマを唄ひ出した。すると、忽ち行衛不明の百本のダイナマイトは彼の頭の中で踊り出した。彼は浮き立つた心を耳に集めて拍子をとつた。――誰が喜びよりも苦しみを欲するものか――歌へ、歌へ――彼は不意に街のお柳を攫へて、こつそりキスしたときの煌めく欲情を思ひ出した。

――あのお柳は今頃は、港の窓から火の點いた船を算へてゐるにちがひない。――

白目の下男が火のつかぬランプをさげて、俵の間からむつくりと這入つて來た。

霧は峽谷の中で渦巻きながら雨になり出した。

五

山蟻は截り倒された喬木の幹の上を急がしさうに往つたり來たりしてゐた。計介は重さうに仲間の死骸を啣はへてよろめいてゐる一匹の蟻を見詰めてゐた。

そのとき、濡れた崖の横腹から一臺のトロッコが現れると、雨の中を傾いて彼の方へ馳け降りて來た。ブレーキを持つて突つ立つてゐる坑夫は頭髪に風を立てて叫び出した。

『十四號で、やられたぞォ』

計介は表の方へ馳け出してみた。毀れかかつたレールの下を疾走して來るトロッコの上に、血にまみれた若者が合羽を冠つて倒れてゐた。

『やられた、やられた。』

負傷者を乗せたトロッコは彼の前で一段と喚くと、颯爽としてまた岩隧へ辷り込んだ。

後では峡谷の風景が雨に濡れたまま蕭條と靜まつてゐた。遠くの岩角を墨汁のやうに浮き上らせた雲の中から、弱々しい蟲の聲が聞えて來た。

計介は此の靜まつた峡谷の中を、街の病院まで血をつけて馳け抜けて行くその一條の狂暴な空氣が恐ろしかつた。

それは丁度計介一家に反感を持つてゐる峡谷の人々の胸へ、火をつけながら馳け下つてゐるやうなものだつた。彼は直ぐそのまま、火事場へ飛込む氣持ちで、現場の十四號の隧工へ行つてみた。

十四號の入口からは、物々しい顔をした坑夫達がトロッコを押して崖の方へ進んで來た。トロッコの上には、鋭い角を立てた凶惡な相貌の岩塊が、一つ傲然と乘つてゐた。

『これが犯人だな。』

『こいつですよ。こいつがどッと天井から來やがつたんでサ。肋が五六枚折れましたかな。あの男は新米ですからハッパの後へ飛び込んでいつたんですよ。馬鹿な。』

十四號の飯場頭は計介を見ると、血のにじんだ岩塊の頭を足で踏みつけながら云つた。穴の中ではダイナマイトをかけた直後が一番危険なときである。計介には隙間の弛んだ岩穴の中へ輕卒に飛び込んでいつたその男の様子が眼に見えた。

『保ちさうかね。』

『いや、街へ行きつくまでに参りますさア。』

『俺ア、後から行つたんだが、アッと云かすと、もう此の石をひつ掻いてやがつた。』と一人が云つた。

負傷者の友人の一人は傍の者が計介に話しかけるのを腹立しさうに舌打した。青ざめた顔を怒らせて彼はその岩塊に手をかけた。

『おい、抛り込め。』

『よし來た。』

忽ち集つた數人の手の中で、黑い岩塊は欝憤を晴した凶賊のやうに、悠々と涯の傍へ動き出した。

『よいか、やるぞ。』

『いち、にい、さん。』

『こん畜生ッ、』と聲が揃つた。

岩塊は一叢の羊齒の葉を突き破つて轉がると、がッと唸つて崖の中途で飛び上つた。と、あたりの岩片を蹴りつけながら、猛烈な生物（いきもの）のやうに渦の中へ飛び込んだ。

萬事がすむと計介は坑夫達が一齊に自分の方を見たと思つた。自分を投げ込んだ彼らの手際を示すかのやうに、

『こら、この通り、』と誰も彼もの顏が澄してゐた。彼は發作的に狂暴な怒りを感じ出した。

彼はふと崖の中途を見ると、血に濡れた羊齒の葉が破れたまま、未だしなやかに搖れながら雨に打たれてゐた。

――よし、俺もやつてくれ。

彼はいきなり彼らに脊を向けると、眞つ先に立つて、斷崖の先端の描いた線の上を、怒りに屹立した一本の棒のやうに歩き出した。彼の後から坑夫達は默つて來た。彼の脊中は後に潜んだ沈默に吸ひ込まれて縮まりながら、前へ前へと一團の沈默を引き摺つて前進した。瞬間、彼は自分の兩眼が、自分の肉體に妨げられて後を同時に見ることが出來ないと云ふ人間の形態を祝福した。

彼は坑夫達からひとり放れて安全になると、初めて恐怖のために疲れてゐる自分の心臟を感じた。此の恐怖に自分の收縮してゐる一個の心臟の血壓は、峽谷の中を進んでゐるトンネルの直線にどれほどの影響を與へて行くか、それを考へると、彼は自分の恐怖の進行の形が俄に面白くなつて來た。自分の心臟から恐怖を要求することは、トンネルの意志なのだ。トンネルは自身の成長する養分として、その横たへた身體に附着して生活してゐる人間の群れから、絕えず適宜の感情の食物を吸收する。さうして、彼が街まで延びたとき、街は二倍の光度をもつて燦然と輝くのだ。――

――しかし、それがどうしたんだ。

計介はいつのまにか雨に濡れて桶のやうにびしよびしよになつてゐた。彼は學生時代に習つた地形學の原論をふと思ひ出して呟いた。

――地表に働く營力の最後の目的は、總て、太陽の均平作用である。

六

峽谷は月の下で鉛の山のやうに光つてゐた。計介は十三號の飯場からお熊を誘ひ出さうと計畫した　彼はもう直ぐ街から到着する筈の鑿岩機が坑夫達に嗅ぎつけられてゐるかどうかを知りたかつたからである。

彼は飯場へ行くと、水壺にかかつた筧の水を跨いで裏口から覗いてみた。すると、お熊は、立ち上つた男の胸へ猛鳥のやうに飛びかかつた。

『ぶち斬るぞ。』と男は叫んだ。

男はお熊の首へ手を卷くと、ぶるぶる左右に搖れ出した。お熊は男の片足をひつかかへて押しつけた。と、男の頭はどつと後の藁壁の中へ突き刺さつた。

計介は此の二人の格鬪を別に珍らしいとも思はなかつた。これはいつでも起るお熊と男との痴情の果だ。

男は藁の中へ頭を突き込んだまま逞しい片足を觸角のやうに振り廻して呻いてゐた。その暇にお熊は素早く表の方へ飛び出した。彼女は月に誘ひ出された狐のやうに、どこかの岩影に隱れてゐる新らしい男の所へ行くのである。

計介は小屋の横へ廻つて、お熊の行く先きを眺めてゐた。彼女は太股に月の光りを踊らせながら、勇ましく枕木の上を馳けていつた。暫くすると彼女の後からビール壜をひつさげた男が靜まり返つた殺氣を含んですたすたと馳けて來た。

丁度お熊が岩角の先端を廻らうとしたときである。「待てッ。」と男は叫ぶと、お熊を目がけてビール壜を投げつけた。壜は一閃、岩角に衝つて爆けると、月の破片のやうにばらばらと崖の下へ散つていつた。

計介はお熊の行衛を追跡することを斷念した。今數分の後、岩影で野蠻な喃々の聲が二つ洩れれば濟みさうに思はれたからだつた。彼は暫く筧の傍の苫の上に腰を下ろしてお熊の歸るのを待つてゐた。

隣りの小屋の湯氣の滿ちた裏窓からは、滿面に腫物を咲かせた坑夫の子の寢顔が菌のやうに見えてゐた。その顔の横からは、怠惰な足が一本鬚を生やして延び出てゐた。その足と寢顔の上で、時々大きな母親の影が湯氣と一緒に搖れてゐた。

その横の飯場頭の部屋の中では、渡り者の坑夫達が轉がりながら放埒な殺人法を物語つてゐるのに相違なかつた。ここの頭の瀧川はもう人を三人殺して來た男である。人を一人殺す度に彼は部下の者から尊敬された。さうして、彼はまたより部下の信頼を得んがために計介の父の所へ坑夫達の代表となつて要求を持ち込んで來るのが例であつた。その癖、彼は計介の父が利益を得てゐる歩合よりも、時にはより多く坑夫達の割前を刎ねてゐた。實はトンネルが一日街へ近づけば、その近づいた程度に應じた金額を計介の父から受けとるものは、坑夫達ではなくして此飯場を持つた飯場頭である。彼はその金の中から、坑夫達の食費と、頭として尊敬された滿足な代價とを引きとつた殘金を、單價に從つて下の坑夫達に與へるのだ。さうして、坑夫達は、ただ此の頭の命のままに、何らの不平をも赦されず決定された日給額をもつて、日日岩石と格鬪を續けて行く。

もし彼らが一尺トンネルを街へ向つて押し出せば、その上へ落ち込んで來る街からの利得は、計介の父と飯場頭とが、ただ無爲の報酬として簡潔に取り去つて了ふだけなのだ。此のため、トンネルの進行と共に起る爭ひは常に計介の父と飯場頭との間に於て續けられた。飯場頭は部下の坑夫達の暴力を背景にもつて計介の父を壓迫した。しかし、計介の父は、ただ飯場頭を撰定し得る權力と、所得を誤魔化し得る地位以外の何物も持つてゐなかつた。

計介は飯場頭の中でも特に瀧川にもつとも反感を感じてゐた。瀧川は部下の坑夫達を壓迫するために用ひる力さへ、彼の殺人して來た頭數と、その屏風のやうな肩とであつた。

七

計介はふと瀧川飯場の坑夫達が隱してゐるダイナマイトのことを思ひ出すと、小屋の外から藁壁の裾を手探つて歩いてみた。彼の影の移動につれて、踏まれる菌の花の中でキリギリスが鳴きやんだ。

彼が足音を忍ばせて月光の中から軒影へ廻らうとしたときである。不意に軒の闇の中で二人の男女がゆれ出した。計介は小川を飛び越すやうに、小屋と小屋との間をひらりと飛んだ。だが、飛んだ瞬間、彼は眼の一角で、濃艷な瀧川の妻の亂れた赤い姿を見てとつた。

計介は瀧川がゐないと知ると、表へ廻つて彼の小屋へいつてみた。中には坑夫が一人火の消えたバットを喰はへたまま眠つてゐた。彼は今すぐにも這入つて來るにちがひない瀧川の妻の亂れた樣子を眺めるのに興味をもつた。彼は藁の上に腰を降ろして部屋の中を見廻した。此の部屋の中のどこかにダイナマイトが隱れてゐる。それを思ふと、彼は今此の家に火を點けて、次から次へと正直に自分の所在を爆發させて行くダイナマイトの顏が見たくなつた。

暫くすると瀧川の妻のお品が這入つて來た。

『あーら、いらつしやい。』

『今晩は。泥棒がしたくなつたので坐り込んでゐるんだよ。誰もゐないぢやないか。』

『ええ、坑夫が二人逃げたので皆が追つかけていきましたの。』

『いつ逃げたんだ。』

『さうね。今頃は崖から抛り込まれてゐる頃よ。』

良人の留守を適用しても此の若い女は湯から上つたやうにさばけてゐた。

『二人逃げたとすると、三百圓の損か。』

『さうよ。でも、こんな處から逃げないものは馬鹿だわね。私、あの二人の逃げるのはちやんと前から知つてゐたの。』彼女は聲を潜めて囁くやうに彼に云つた。

『ぢや、默つてゐたのはおかしいぞ。』

『だつて、私だつて逃げたいのよ。』

計介は全く思ひがけないお品の言葉に默つて了つた。何ぜ自分にさう云ふことを彼女は言ひ出したのか。それが彼には分らなかつた。

『君は瀧川が嫌ひかね。』

『ええ、私、瞞されて來たんですもの。』

『ぢや、逃げるんだ。』

『逃げるなら、こんなときだわね。』

『瀧川と一緒になつてどれほどになるんかね。』

『半年ほどよ。でも木山さん、私、逃げたいんだけど。』

そこまで云ふと、急にお品はうなだれて默り出した。彼は一寸釣られて此の峽谷から逃げ出す方法を考へた。

『でも、私が逃げたら、瀧川はきつと私を殺して了つてよ。』

『そりや分らないな。しかし、あんな男だからそのうちにまた他の女を見つけるさ。』

計介はふとその話とは全く別の、瀧川が自分達一家の者にどんな計畫を立ててゐるかと云ふことを知りたくなつた。

『瀧川は俺の親父のことなんか何とか、云つてゐなかつたかね。』

『云つてゐたわ。怒つてゐてよ。』

『そりや怒る。』

『あなたのお父さんが單價を上げないものだから、私、まだ着物も買つて貰へないの。』

『實は、俺もこの山にはもうゐたくないんだが、どうも思ふやうに行かなくて。』

『あなたなんかいいぢやないの。お金はあるし、身體はきくし。私なんか一寸思ふやうに動くと殺されるんだから。』

『そんな風に見えるかね。俺だつていつ殺されるか知れたものぢやないんだが。』

『どうしてさ？』

『現に瀧川なんか、俺や親父を敵のやうに思つてゐるんだからね。』

彼女は暫く默つてゐてから眠つてゐる男の方を窺つた。

『あの男も、もう直きに逃げ出してよ。そりや氣の毒なほど瀧川になぐられ通しなの。』

『とにかく、お品さんや坑夫はたゞ上手に逃げればそれでいいんだ。しかし、俺はさうはいかない。第一俺なんか自分一人で逃げたつて、後に親父や妹がゐるんだからね、それが始終氣になつて。』

『ほんとにここにゐると、始終びくびくしなきやならないわね。今日逃げた坑夫だつて、夕べはビール壜で頭をなぐられたのよ。』

『どうしたんだ。』

『ただね、風邪を引いて寢てただけなの。』

二人は呼吸が詰つたやうに默つてゐた。

『私、思ひ切つて逃げやうかしら。』とお品は云つた。

『そりやそうするに限る。』

『でも、私、うまく逃げられるかしら。』

『逃げてからが難かしいよ、逃げてからどうするんだ。』

『そりや何んでもないわ、あのね。』とお品は云ふと立ち上つて、「一寸」と云つた。

彼女は裏口へ出ると、月の光りの中からすらりと彼の方を振り返つた。彼はお品の後からつい

て出た。筧の下の蘭の白い花の中で、入れ忘れられた釜が月光を含んだまま傾いてゐた。

お品は斷崖の端の窪んだ岩影の間へ來ると、あたりを見透かしながら息づく大輪のやうな華やかな胸を近づけた。

『ね、木山さん、私、ほんとうに逃げるつもりなんだから。』

『うむ。』

彼の呼吸は彼女の忙しい胸の起伏に引き摺られた。

『あなたに迷惑はかけないわ。私、とうから逃げやうと思つてたんですもの。』

『うむ。』

『私、瀧川に瞞されて來たんだから、捕まれば街の警察へ云へばいいわね。』

『瞞されたつて？』

『私、お父さんがここにゐるつて云はれたものだから、瀧川について來たの。そしたら、みんな噓だつたのよ。ね、逃げるんだつたら、今からがいいかしら。』

『駄目だ。』

『夜明け前の方がいいかしら。』

『うむ、今夜は皆が坑夫を捜すのに疲れてゐるから、その方がいい。』

『さうね、ぢや私、さうするわ。』

計介は大海へ乗り出したやうに緊きしまつて來た。

『一人で逃げるのかね。』

『ええ、何ぜ？』

『連れがあるんだらう。』

『いやよ、さつきはお金を借りてたの。』

『いや、ある方が心配がないからさ。』

『一人よ。あなたも逃げてくれればいいんだけど。』

そのうちに行く。だけど、お品さん逃げてからどうするんだ。』

『私、女給になるの。前にもさうだつたのよ。』

『危いね。』

『ね、ね、どうかしてよ。』

『よし、』

彼は片手で藤蔓を掴んだまま、お品の脊中に手を廻した。月光を割つた鼻が、鮮鋭な丘のやうに迫つて來た。女の身體が彼の腕の中で、重々しく斷崖の外へしなり出した。と、羊歯の葉が彼女の頭髪に撓められて跳ね上つた。

『私、ほんとに待つててよ。』

『ああ。』

『街へ行つたら直ぐ手紙を出すわ。』

『うむ。金がいつたら送つてやる。』

『私、お金よりあなたに來て貰ひたいの。』

『分つた。』

『その方がどんなに嬉しいか知れないわ。』

『うむ。』

『何だかあなた、ぽんぽん云つて。ね、ね、ほんとに來てよ。私、さうぢやなけりや、ね、ね。』

とお品は云ひながら計介の胸を持つて揺り動かした。

八

計介はその夜床の中へ這入つても眠れなかつた。絶えず雨戸の外から苔を踏んで近か寄る瀧川の足音を身に感じた。胸が高まると、耳元のピストルに手を觸れて冷たい銃身の感覺に氣を鎭めた。時計の音がだんだん鋭く彼の心臓を狙つて進んで來た。ふと彼は斷崖の方から岩を痒きむしる物音をききつけた。彼は跳ね起きて障子を開けた。と、彼の大きな影が靜まつた峽谷の中へ倒れたまま默つて彼を見詰めてゐた。彼は一齊に銃口を向けられたやうに身が慄へた。彼は身體を

すくめてランプを消すと横になつた。洗はれたやうに新鮮な峽谷が、忽然として月光の中へ屹立した。彼の悸えた心は次第にそれから空を向いて延び始めた。すると、彼は間もなく月に眠せられるやうに眠りだした。眼が醒めると峽谷は晴れ渡つてゐた。計介はもう瀧川のことを思ひ出しても昨夜のやうな恐怖は感じなかつた。

　彼はお品が逃げ出したといふ噂を聞いたのはその日の午後であつた。

　瀧川はお品を逃がした手引きを茶店の老婆だと睨んだらしく、街へお品を搜しに行く途中、ダイナマイトをもつて直ぐ茶店に飛込んだと云ふ話も聞えて來た。

　計介は進行を計る寄り道に、瀧川の飯場を覗いて見た。すると、誰もゐない部屋の中にお品の赤い古着の裏が殺されたやうに引き摺られてのめつてゐた。

『やられるな。』彼は脊中を叩かれたやうに動悸が打つた。

　彼は昨夜お品の胸が芳香を放つて反り返つた斷崖の傍へ行つてみた。彼が彼女を抱きかかへたときに握つた藤蔓は、葉を落としたまま所々擦りむけて青い肌を出してゐた。ふと彼はお品の胸から股へうねつた芳醇な熱い一疋の線を思ひ出した。

　それは昨夜から絶えず彼の胎内に入り浸つてゐる新鮮な吸盤を持つた生物（いきもの）だつた。此のお品の彈力に滿ちた熱線が搖らめく度に、彼は彼女に逢ひたくなつて切なかつた。

　遠くの一面の白い花の中で、黑い花のやうに開いたトンネルの口から、坑夫達は鍛冶場へ昆蟲のやうに飛び降りてゐた。續いてダイナマイトの爆發する音響が、次ぎ次ぎに峽谷の中で震動した。

　計介は筧の水を飲みながら、瀧川飯場から坑夫達が續々逃亡することを希望した。もし瀧川が日日お品を街へ搜しに出歩いてゐるとするなら、瀧川飯場が潰れて行くにちがひなかつた。もし瀧川飯場が潰れたなら、街から來る鑿岩機を瀧川の持ち場の十三號のトンネルへ据ゑつければそれで良いと計介は考へた。もしまた、その十三號が彼自身の自由になる日が來たならば彼はそれから上る利益を直接坑夫達へ分讓しやうと計畫した。すればピストルが不用になる。物價の暴騰が恐るるに足らなくなる。坑夫達の生活は堅固になる。負傷者の家族は安心する。父と妹の危險

が救はれる。さうして、街へ出るトンネルは、日日、その進行能率を平和に増進さすにちがひない。——

計介はお品の逃亡を感謝した。ただ今は、もつとも健全にトンネルを街へ進行さすための問題として、瀧川の理性がお品の逃亡によつてどれほど狂ひを生じてゐるかと云ふことが殘されてゐるだけだつた。それを思ふと、彼はまたあのお品の胸から股へ走つた潑剌とした一疋の熱線を思ひ出した。もし瀧川の頭に狂ひが激しく生じたとしたならば、それはお品の胸から股へ走つた熱線が、街へ走つたからにちがひないのだ。——

つまる所、お品の一疋の線が街へトンネルを押し出す線であつたのだ。——計介は、此の突如として峽谷の中からめくれ上つて來た一本の新鮮な理論を發見すると、にやにや陰謀者のやうに笑ひ出した。

——濟まぬが、あの線は俺の胸へひつ着いた線なんだ。

——あの線は俺の云ふままになる線だ。

九

その日の夕暮、瀧川飯場からまた三人の坑夫が逃げ出した。しかし、お品を搜しに行つた瀧川はまだ街から歸つて來なかつた。

次の日の夕暮れが再び來た。

すると、白眼の下男が青ざめた顏をして、レールに躓きながら計介の方へ馳けて來た。

計介は不吉な風を感じて立ち上つた。

『旦那さまが、旦那さまが。』

下男は吃つたまま計介の手を引つ張つた。

『やられたのか。』

『旦那さまが。』

計介は下男の指差してゐる斷崖の方へ馳け出した。やつて來たな。と彼は思つた。

峽谷は眞白な嵐に見えた。

――だが、どこへ行くんだ。――

峽谷は廻つてゐる車輪に見えた。

彼は光つたレールに曳かれて岩層を一つ廻つた。

と、斷崖の上で、彼の父と瀧川が抱き合つたまま傾いてゐた。

彼は空中を狙つてピストルを二發放つた。

彼はしなしな風に吹かれたやうに傾く二人の方へ近づいた。

計介の父は、下から瀧川を睨むと、最後の言葉を一口云つた。

『貴樣、話では分らぬ奴か。』

すると、突然、瀧川は、平手で打たれたやうに引き下つた。

クライマックスの頂點で、瀧川は脆くも一滴、波の虚榮心へ注射されたのだ。

計介の父は眞直ぐに立ち直ると、汗をかいたまま威張り出した。

『話があるなら、今晩來い。』

『はア、』と瀧川は頭を下げた。

父と息子は歸つて來た。二人は竝んだまま、鼓動の高さを驗べるやうに默つてゐた。

計介は瀧川の怒りがお品の逃亡と徒勞な彼の探索からだと云ふことは直ぐ分つた。瀧川はお品の逃げた原因を、彼女の着物を買はなかつたがためだと思つてゐる。彼のお品を縛ぎとめてゐた繩が、一枚の晴着だつたとしたならば、瀧川に晴着を買はさなかつた計介の父が突きかかられるのは定つてゐた。

――しかし、お品を逃がしたのは此の俺だ。

――お品の線がトンネルを押し出す前に、親父の身體が押し出された。

計介は悲劇と喜劇の境界線が何處にあるのか分らなかつた。

だが、彼は瀧川に對する反感から今は少しも彼に恐怖を感じなかつた。ただ恐怖に代つて腹立たしさが萌じて來た。二人が家へ歸ると、妹は窓へ投げかけられた着物のやうに、俯いたまま宛

の外へ折れてゐた。霧が煙のやうに峽谷へ流れて來た。下男は物音を潛めて夕食の準備をし始めた。霧の中を一列に並んだ坑夫の足が影のやうに通つていつた。計介の父はランプが點いても默つてゐた。夕餉の時にも默つてゐた。恐らく頑固な父の胸で、恐怖が嵐のやうに吹き卷くつてゐるのに相違ない。――ふと計介は、父が坑夫の單價を上げ出すことを考へてゐるのではないかと考へた。

『お父うさん、危いですからもう單價を上げてやつたらどうですか。』

彼は夕食をすませてから、父の傍で煙草を吸ひながら一滴の注射をやつた。だが、父は起されたやうにむつとして默つてゐた。

『お父うさんはいいでせうが、傍にゐる者が心配でいけませんよ。』

『うむ。』と父は初めて云ひ出した。

『上げてやつても根つから損はしないでせう。僕は損をするより、今日のやうな危いことのない方がいいですな。』

『お前のやうなものは、此の商賣は出來んわい。』まだ、生意氣なと彼は思つた。

二人はそのまま默り込んだ。しかし、計介は父が弱味を見せない範圍に於て、間もなく確に單價を上げて行くにちがひないのを見てとつた。彼は街へ逃げ出したお品の線が、今頃默つて父の心臟を狙つて來たのを感じると、霧で曇つたランプの下でまたにやりにやりと笑ひ出した。

十

計介は坑夫の單價の上ることが、トンネルの構成上喜ぶ可きことであるとしても、坑夫の單價が上ることによつて、瀧川が一層坑夫達の中で勢力を張り出すのが不快であつた。彼は出來ることなら、此の機會を利用して瀧川を完全に峽谷から追放したかつた。彼が峽谷に働いてゐる限り、計介の父が坑夫の單價をいくら上げたとしても同じであつた。

瀧川は、その上つた單價に從つて、また下の坑夫からそれだけ絞り上げるのは定つてゐた。

――あ奴はトンネルを食ふ蟲だ。

——あ奴は坑夫を痩せさすバチルスだ。
——あ奴が居れば、今にそこからトンネルは腐るのだ。

しかし、ただ三人の人間を殺して來たと云ふに過ぎない瀧川の一箇の過去が、何故かくも大きなトンネルを腐らすのか。計介は今はただ瀧川の狂暴な性格をめがけて突きかかつて行きたくなつた。

——他のことは後廻しだ。
——あ奴をここから抛り出すのだ。

彼はふと今日瀧川の飯場から、三人の坑夫が逃亡したのを思ひ出した。——これで總計五人の坑夫が逃亡した。五人の勞力がなくなると、瀧川の隧口からは一日平均二尺の進行が遲れて行く。すると、彼の損害は一日平均十圓だ。今だ。

——今一人逃亡すればあ奴は完全に立てなくなる。
——すればあ奴は逃げ出すより仕方がない。

——お品萬歳！
——俺は彼の後へ鑿岩機を据ゑつけるのだ。
——鑿岩機が追ひ出す人間だけは他の隧口へ廻せば良い。

計介は萬事今暫く待つて瀧川の樣子を見やうと考へた。今はトンネルを最も立派に進行さす條件として殘されてゐる問題は、鑿岩機が到着する時機よりも、瀧川の逃亡する時機の方がより早かるべき必要のあることだつた。もし瀧川が鑿岩機の到着を嗅ぎつければ、彼は此の峽谷から動かないのに定つてゐた。もしそれを強ひて追放するとすれば、彼は此の峽谷の中で暴動をひき起こすのは明かなことであつた。

しかし、計介には瀧川の逃亡の後、瀧川の唯一の功績である單價の引上げ運動の結末をいかに處分すべきかが問題となつて來た。恐らく計介の父は、瀧川のゐない限り、單價を上げやうとはしないにちがひないのだ。

——よし、そのときはその時だ。

——俺は瀧川に代つて親父とどこまでも爭ひを續けてやる。
——もしそれでも親父が俺の云ふことを聞かないなら、俺は親父を守ることは斷然やめだ。
しかし、瀧川は逃亡した坑夫の頭數だけ、再び坑夫を募集し始めたとしたならば？　これがまた計介の新らしい問題となつて彼の頭に殘り出した。だが、瀧川が五人の坑夫を集めるには少くとも三百圓の現金が必要だつた。彼に今三百圓の金が出來るとすれば、いづれ計介の父から借りるのは分つてゐた。
——そこで、一つ瀧川に嘘をついてやるのである。
『いや、お前の所のトンネルは、まだまだこれから石が硬くなるばかりだと技師は云つてゐる。お前の所へ金を注ぎこんでばかりゐては、他の飯場が怒り出すに定つてゐる。』
計介の頭は此の嘘と事實の丸藥を考へ出すと、初めて輕くなつて來た。だが、もし此の寸法に一分の狂ひでも出來始めたら、トンネルは峽谷の横腹で洞穴になるにちがひないと彼は思つた。

十一

翌日、お品から計介の所へ變名の手紙が來た。
——私たうたうこんな所へ來たわ。ここは汚いカフェーよ。お別れした晩は眠れませんでした。私の名前はお禮さんつて云ふの、早く來て下さいな。ずつと一緒にゐて下さいなんて云はなくつてよ。御身分が違ふんですもの。でも、一日でもいいから來てちやうだい。早くよ、遲くなれば私、どんなになつてゐるか知れないわ。私もう瀧川に逢ふのなんか恐かないの。私、あなたにお逢ひしたい一心なの。もうずつと山にゐるときから私、あなたのことばかり思つてゐましたの。でも、あなたはいつも横ばかり見て鬱ぎ込んでゐらつしやるんですもの。私だつて仕方がないわ。ね、ね、早くよ、下から呼ぶからここで、ね、——
計介はお品に襟首を摑まれて搖られてゐるやうな感じがした。
『行く行く。だが、まア待つてくれ。』

今直ぐ行つては、瀧川と父とのその後の樣子が分らなかつた。彼はお品に返事を書かうと思つて手近の紙片を搜し出した。積み上げられたダイナマイトの箱の上に用紙が見えた。彼は周章てながら下からその用紙の片端を持つて、上に乘つてゐる塵紙の包み物のまま引き摺つた。と、塵紙の中から、數百枚の紙幣が乾いたビラの樣に、彼の頭の上へ降つて來た。彼は、水を冠つた裸體の樣に紙幣を浴びて動けなかつた。彼はふためきながら散亂してゐる紙幣を掻き集せやうとした。だが、ふと彼は、紙幣に叩かれて化石してゐる自分の心臟を感じると、ぐつと腹が立つて來た。彼は意地になり出した。數枚の紙幣の群れが、微風に波立つて縁側の方へ辷つていつた。

——俺は拾つてやるものか。

紙幣の群れは、彼の背後を馳走する無數の慧敏な魚に見えた。

——此奴だ。

——此奴が人間を馬鹿にした奴だ。

彼は鮮かな十圓紙幣の畑の中に坐り込むと、直ぐお品へやる戀文を書き始めた。

『俺はあのときからあなたに逢ひたくて仕方がない。しかし、今直ぐに逢ひに行つては後が困るのだ。長くは必ず待たせないから、いま暫くだ。ばたばたしないで音無しくしてゐてくれ。金は暫くすれば持つて行く。』

彼は手元にひつかかつた十圓札を四五枚つかんで手紙の中へ卷き込んだ。午前のダイナマイトが地の底で爆け出した。

——いや待て、と彼は思つた。

此の金は親父が坑夫へ支拂ふ此の月の金にちがひない。すると？

——俺の撒き散らした金は坑夫の金だ。

續いてまたダイナマイトが八號で爆發した。

——今俺が此の金を一枚失へば、七人の坑夫の今日の生活が吹き飛んで了ふのだ。

——それを三百枚としてみると？

——二千人の人間だ！

また十號と九號とで爆發した。と、續いて五號が彼の直下で爆發した。
彼は狙はれたやうに狼狽へ出すと、ひらひら風に揺れながら散亂してゐる紙幣の波の中を這ひ廻つた。
『あらあら、兄さん。』
妹は夾竹桃の花束を持つて新鮮な顏で這入つて來た。彼女は暫く手品師でも見るやうに、ぼんやりと彼を見降したまま立つてゐた。
『それ、お父さんが紙で包んでをきなすつたお金でせう？』
『拾へッ。』と彼は云つた。
妹は緣側から崖の方へ飛び立たうとする紙幣の群れを、夾竹桃の花束で掃きよせ出した。遠くの峽谷の上下から、ダイナマイトの爆發する音響が次ぎ次ぎに襲つて來た。
暫くすると、搔き寄せられた紙幣が盛り上つた更紗の模樣のやうに二人の前で混雜した。
『私、折角貰つて來た花が目茶苦茶になつちやつたわ。どうなすつたの。』

『此の金を揃へてくれ。』
『でも、お母さんの日にお金を撒くなんて。隨分お母さんだつて喜んでゐらしつてよ。』
計介には、父が此の多額の金を故意に數枚の鼻紙の中にくるめて出て行つた大膽な心理が直ぐ飲み込めた。金庫の中に秘められた金よりも、鼻紙の中に包まれた金のが方が、いつの場合に於ても、より鼻紙に見えるにちがひなのだ。
彼は妹が紙幣を揃へてゐる暇に、お品と自分の手紙をポケットの中へ押し込んだ。
——しかし、金は？
金は手紙にくるんだそのままをお品へやらうと彼は思つた、
——今にお品が坑夫の單價を上げ出すのだ。その他の誰でもない。これは明かなことではないか。
彼はお品にやつた足らない坑夫の金だけは、やがてお品が瀧川を追放させる報酬として、父がそれだけ負擔すべきが當然だと考へた。彼は直ぐポストのある峽谷の村の方へ下つていつた。

十二

計介が村から歸つて來ると、彼の家の方から瀧川が歸つて來た。二人は當然レールの上で行き合はねばならなかつた。だが、計介には、瀧川の姿がまるで肩の張つた一疋の家畜に見えた。彼が自分がどうして此の瀧川を恐れてゐたのか分らなかつた。彼は瀧川を見降すやうに、彼から二人の距離を縮め出した。

『やア。』と瀧川は猾さうに笑ひかけた。

『やア。』と彼は云つた。

二人はその儘肩を讓り合つて狹い枕木の上を行き過ぎた。計介は二人の間をかすめた風からお品の匂を嗅がうとした。

――だが、あの曲者め、俺の家で、何をやらかして來たのかな。

ふと彼は父が絞め殺されてゐる所が浮んで來た。彼は急いで家へ這入ると、父はよろめきなが

らズボンへ片足を入れてゐた。

『今、瀧川が來たでせう。』

『うむ。』と父は云つた。

『何にしにやつて來たんです？』

『鑿岩機が來たら、あ奴に借してやることにしてやつた。』

――駄目だ、と彼は思つた。

トンネルが俄に彼の頭の中で崩れ出した。

『あ奴に借してやらないと、進行がむづかしい。』と父は云つた。

――親父は瀧川が恐いのだ！

彼は腹立しさに默り込んだ。

――俺が瀧川を一番苦しめてゐるときに、瀧川を一番助けてゐたのは俺の親父だ。

――賭博の勝負は決定した。

——瀧川が勝つたのだ。

計介は一切の苦しみを振り捨てゝ、今は、瀧川に復讐してやるために、街のお品の所へ馳け出して行きたくなつた。

『いや、何に、利益は俺と瀧川とで分けるのさ。』と父は云ふと笑ひ出した。

彼は横を向きたくなつた。

——もう單價は上ることがないだらう。坑夫達は鑿岩機に食はれて了ふにちがひない。

『それで他の者が、指を喰はへてゐればいいですね。』と彼は云つた。

『何ァに。』

『第一もう物價が騰つて來るぢやないですか。』

『さうしたら、それまでさ。』

『まだまだ瀧川のやうな奴の出て來るのは、これからですよ。』

父の鼻は赤い顏の眞ん中で膨れ出した。

『貴樣は默つてゐりやそれでいいんだ。』

『來ましたね。』

『何をッ、』と父は叫んだ。

彼は横づらを毆打られると、反り返つた。と、また父の拳が振り上つた。彼は表の方へ飛び出した。

——誰がこんな苦しみをするものか。

——今にトンネルは洞穴になるだらう。

——今に親父の死骸が洞穴のまん中で寢轉んでゐるだらう。

彼はトロツコを拾ふとお品のゐる街の方へ疾走した。岩層のカーブを乗り切る度に、峽谷の風光は明るく河口の方へ展開した。晴れ渡つた河口からは、濃藍色の鰯の群れが峽谷の中へ登つて來た。彼は初めて、トンネルを拔け出るやうに刻々幸福な速力を感じ出した。

妻

雨がやむと風もやむだ。小路の兩側の花々は倒れたまま地に頭をつけてゐた。今迄搖れつづけてゐた葡萄棚の蔓は靜まつて、垂れ下つた葡萄の實の先端からまだ雨の滴りがゆるやかに落らてゐた。どこからか人の話し聲が久し振りに聞えて來た。

『まア、人の聲つて懷しいものね。』と妻は床の中から云つた。

妻はもう長らく病んで寢てゐた。彼女は姑が死ぬと直ぐ病ひになつた。

遠くの荒れた茫々とした空地の雜草の中で、置き忘れられた椅子がぼんやりと濡れた頭を傾けてゐた。その向ふの曇つた空の下では竹林の緣が深ぶかと重さうに垂れてゐた。

私は門の小路の方へ倒れた花を踏まないやうに足を浮かせて歩いてみた。傾き勝ちな小路の肌は滑かに青く光つてゐた。その上を細い流れが縮れながら蟲や花瓣を浮べて流れてゐた。すると私の足は不意に辷つた。私は亂れた花の上へ仰向きに倒れた。冷たい草の葉がはツしと頰を打つた。雨が降るといつも私はそこで辷るのだ。

格子の向ふで妻が身體を振つて笑つてゐた。私は馬鹿げた口を開けて着物を着返へるために家の中へ這入つた。

『どうも早や、參つた、參つた。』

『あなたの、あなたの。』さう云ふと妻は笑つたまま急に咳き出した。

『俺が惡いんぢやないぞ。花めが惡いんだ。』

『あなたが周章てるからよ。』

『俺は花を踏まないやうに氣をつけてやつたんだ。』

『あの格好つたらなかつたわ。』

私は芝居の口調で、

『いやいや、』と云つた。

『もう一度辷つてらつしやいな。』

私は默つてゐた。
『まるで新感覺よ。』
『生意氣ぬかすな。』
私は光つた緣側で裸體になつた。病める妻にとつて、靜けさの中で良人の辷つた格好は何よりも興趣があつたに相違ない。初めの頃は私が辷ると妻の顏色も青くなつた。それがだんだんと平氣になり、第三段の形態は哄笑に變つて來た。私達は此の形態の變化を曳き摺つて此の家へ移つて來た。
『赤ちやんがほしいわ。』と、突然妻が云ひ出すことがある。
さう云ひ出す頃になると、妻は何物よりも、ユーモラスな良人の辷つた格好から愛すべき風格を見附け出す。その次ぎの第四の形態は何か。私は次ぎに來る左樣なことを考へるものではないと考へる。
次の日の朝雲は晴れた。私は起きると直ぐ葡萄棚の下へ行つて仰いでみた。葉の叢から洩れた

一條の光りが鋭く眼を貫いた。私は顏を傾け變へた。露に濡れた葡萄の房が朝の空の中で克明な陰影を振りかざし、一粒づつ滿腔の光りを放つてゐた。私は手を延ばすと一粒とつた。
『うまい。』
床の上へ起き直つた妻が、
『私にもよ、私にもよ。』と云つて手を差し出した。
『喜べ。うまいぞ。』
私は露で冷めたくなつた手に一房の葡萄を攫んで妻の床の傍へ持つていつた。
『あらあら、重いわね。』
『ベテレヘムの女ごらよ。ああ汝の髮は紫の葡萄のごとし。』
『もう直ぐ蟲がつくから、今とらないと駄目だわね。』
『汝は汝の床もて我を抱け。我の願ひを入れよ。』
『まア、おいしい。口がとれさうよ。』と妻は云つた。

見ると、妻の髪に白い韮の花がこの朝早くから刺さつてゐた。
私はまた葡萄棚の下へ戻つて來た。それから井戸傍で身體を拭いた。屈つてある老婆が倒れた垣根の草花を起してゐた。
私はふと傍の薔薇の葉の上にゐる褐色の雌の鎌切りを見附けた。よく見ると、それは別の青い雄の鎌切りの首を大きな鎌で押しつけて早や半分ほどそれを食つてゐる雌の鎌切りだつた。
『なるほど、こりや夫婦生活の第四段の形態だ。』と私は思つた。
雄は雌に腹まで食はれながらまだ頭をゆるく左右に振つてゐた。その雄の容子が私には苦痛を訴へてゐる表情だとは思へなかつた。どこかむしろ悠長な歡喜を感じた。その眼の表情には確に身を締めつけられるやうな恍惚とした喜びがあつた。婆やが曲つた腰つきで箒を持つて無花果の樹の下から私の方へ歩いて來た。
『おい、婆さん。一寸來て見た。』と私は云つた。
婆やは私の指差してゐる鎌切りを覗き込むと、

『ははア。』と云つた。
『これ、何んだか知つてるかね。』
『旦那さま、こりや二疋ですな。』と老婆は急に大きな聲を出した。
『さうだ。』
すると老婆はまた「あらツ」と聲を上げた。
『何んだ？』
『こりや旦那さま、食はれてゐますのぢや。』
『そりやさうさ。』
『ははア。こりや、旦那樣、食はれてをりますのぢや。』
『食つてゐるのは雌なんだよ。鎌切りの女は亭主が入らなくなると食ひ殺すんだ。』
『ほんとうでございますか。』
『本當さ。』

『まア奥様、來て見なさい。憎い奴がをりますわ。自分の亭主を食ひやがつて、こりやツ、こりやツ。』と老婆は云つて足で地を打つた。

私は身體を拭きながら無花果の樹の下へ來た。無花果は厚い葉の陰から色づいた實を差し出してゐた。不氣嫌さうに栗のいがは膨れてゐた。

私はまだ鎌切りに心から腹を立ててゐるらしい老婆の容子が面白かつた。彼女は二十臺に良人に別れた。それから四十年、獨身で來ながらもその間何をして來たか分らなかつた。彼女は今も烈しい毒を體內に持つてゐた。その老婆が亭主を食つたと云ふので雌の鎌切りに必死に腹を立ててゐるのである。

暫くすると、老婆が箒を持つたまま私の傍へ來た。

『旦那さま、殺してやりましたわ。』

『食つて了つたか?』

『食つて了ひましたよ。すつかり食ひました。』

『さうか。』

『憎ツくい奴でございますな。あんな奴は、ひどい目に合はしてやりませんと腹が立ちますよ。』

『食はれてゐる奴は喜んでゐたんだぜ。』

『冗談を云ひなさんな。』

『女に食はれたら誰だつて喜ぶさ。』

『へへへへへ。』と老婆は笑ひ出した。

彼女は私の言葉を下品な意味にとつたと見えた。

彼女は直ぐまた妻のゐる方へ引き返して行くと、

『奥さん、あの旦那さまは油斷なりませんよ。なかなか、どうしてあなた。』

そんなことを云つてゐる老婆の聲が耳に這入つた。

私はそのまま裾を捲つて露の溜つてゐるきらきらした雜草の穗の中へ降りて行つた。

微風が朝の香りを籠めて草の上を渡つて來た。草玉が青い實を靜に搖つた。藪列の葱が露に輝

きながら劍のやうに垂直に立つてゐた。

『おーい。』

『はーい。』と妻の低い聲がした。

『無花果、入らないか。』

『はーい。』

遠くの草の中で、幼い子供が母の云ふことをよくきいてゐる淸らかな姿が見えた。

靜かなる羅列

一

Q川はその幼年期の水勢をもつて鋭く山壁を浸蝕した。雲は濃霧となつて溪谷を蔽つてゐた。山壁の成層岩は時々濃霧の中から墨汁のやうに現れた。濃霧は川の水面に纒りながら溪から溪を蛇行した。さうして、層々と連る岩壁の裂け目に浸潤し、空間が輝くと濃霧は水蒸氣となつて膨脹した。

Q川を挾む山々は、此の水勢と濃霧のために動かねばならなかつた。

その山嶺の屹立した岩の上では夜毎に北斗が傲然と輝いた。だが、その傲奢を誇る北斗はペルセウスの星が、刻々にその王位を掠奪しようとして近づきつゝあることには氣附かなかつた。その下で、Q川は隣接するS川と終日終夜分水界の爭奪に孜々としてゐた。

二

Q川の浸蝕する狹隘な溪谷へは人々の集團は近かづいて來なかつた。それにひきかへ、S川の穩やかな溪谷には年々村落が增加した。

その國土の時代では、久しく天下に王朝時代が繁榮した。そのため、彼らの壓制は日毎に民衆の上に加はつた。

Q川は地質時代の軟弱な地盤を食ひ破つた。さうして、その河口にひとり默々として堆積層のデルタを築き上げてゐるとき、その國土では、遂に鬱勃としてゐた民衆の反抗心が王朝に向つて突激を開始した。

民衆と王朝の激烈な爭鬪は續けられた。王朝はその久しい優惰のために敗北した。彼ら一黨は民衆のために虐殺された。さうして、僅かに殘つた數人は人目を忍んで人跡稀なQ川の濃霧の中へ逃げて來た。

彼らは武裝を解いた。山々は險峻に彼らを守りながら季節に從つて柔らかに青葉を變へた。彼らは高い山壁の傾斜層に細々とした徑(みち)をつけた。さうして、彼らは溪流を望んだ岩角でひそかに彼らの逞しい子孫を產んでいつた。

三

Q川とS川との分水界の爭奪は益々激烈になり出した。S川は恐らく數回の勝利を物語りながら、その河口に壯大な砂の堆積層を築いていつた。此のため、S川の浸蝕力は、Q川に比べてはるかに緩漫になり出した。だが、S川のその堆積層のデルタは、徐々として海面から壯麗に浮かび上つた。新しい滑かな處女地が河口を挾んで生れて來た。人々の集團はデルタの平野の上に訥朴な巢を造つた。彼らは純然たる土民であつた。彼らはその國土の支配者に屈服しながら、耕作しなければならなかつた。だが、彼らの國土の支配者は既に民衆ではなかつた。

嘗て、王朝は民衆に顚覆された。しかし王朝を顚覆さした民衆は、再び彼らの助けた野蠻な總帥のために支配されねばならなかつた。さうして、封建時代が堅實に彼らの國土の上へ君臨した。軈て、S川の造つた開析デルタの上へ一つの城が築かれた。

四

Q川の活動は幼年期から壯年期に這入つていつた。その水勢の浸蝕力は横に第三紀層の緩斜層を突き崩して擴つた。此のため、S川へ流れる分水界の水量は、その均衡を破つて次第にQ川の水流に誘惑された。

Q川を繞る綿々とした濃霧の中では、王朝時代の殘黨がその子孫を美しく繁殖させた。しかし、彼らは彼らの祖先が嘗つて民衆に顚覆された事實と怨恨とを次第に忘れていつた。さうして、彼らの繁殖力はその屈辱の忘却力に從つて溪谷を下り、濃霧の中からQ川の洋々たる河口へ向つて擴がり出した。彼らはいづれの國主にも屬さなかつた。しかし、彼らは彼らを繁殖せしめた直系の家族のために支配されねばならなかつた。そこで、Q川の流域には、隱然たる豪族がその團結

力を延ばし出した。彼らはS川のデルタの上に生活する土民の集團に對抗するため、彼らもまたQ川の河口の岩角に尖鋭な一つの城を築き上げた。

だが、彼らは豊饒なS川の住民の生活力とその貧しい力を爭ふことは出來なかつた。このため彼らは彼らの生活力の主力を武力に向けた。

五

Q川とS川との水流の爭闘が激しくなるに從つて、その各自の流域に築造された二つの城の爭闘も激しくなつた。しかし、Q川の豪族の城が、しば／＼S川の土民の城に壓迫されつゝあつたにも拘らず、川それ自身の爭闘は絶えず反對の現象を示してゐた。Q川の浸蝕力は白堊紀の地層を食ひ破つて益々深刻になつていつた。S川の浸蝕力は、河口の堆積デルタが確乎とした地盤となるに從ひ、益々その力を弱めていつた。さうして、Q川の支流の水を滔々と奪ひ出した。

六

此のSとQとの二川の爭奪し合ふ現象を、絶えず眺めてゐたのは北斗であつた。だが、北斗それ自身は、遲々として天界で滅んでゐた。さうして、ペルセウスの星は、終に北斗の位置を掠奪した。新しい北斗は、再び爭闘し合ふ此れらの山河の上で輝き出した。

Q河口の城の人々は、S河口の城主の久しい壓迫から跳ね起きるときが近づいた。何ぜなら、Q川の支流は完全にS川の支流を掠奪し終へたからである。此のため、S川の本流は、浸蝕された醜いケスタの段階を露はしながら、渇れ果てゝ茫々たる野になつた。かくして、S川の水量を奪つたQ川はひとり益々肥えていつた。それと同時に今迄S河口で行はれた通商は盡くQ河口へ集り出した。Q城の貧しい財政はその河口と共に膨脹した。新らしい生産が始つた。新らしい武器が購入された。さうして、Q城の擴大された新らしい生活力はS城に變つて、逆に彼らを壓迫し始めた。」

七

Q城の豪族の勢力は、日に日にその領土を擴張した。Q河口に集る人々の集團は年々に增加した。その村落は市街になり、その市街は港になつた。さうして、S城との小さき爭鬪は豐富な武力と財力とを以つて續けられた。

S城の市民はその疲弊の原因をS川の枯渇と知つた。彼らは川水の復活を計るため、彼らの財力を專心S川の開鑿に用ひ出した。

Q城の市民は彼らの開鑿を防害するため、Q川へ流れる上流の支流を堅固な石垣で盡くせき止めた。しかし、S城の市民は忽ち彼らの石垣を突き崩した。

一大戰鬪が二城の間に開始された。軍馬の集團が日毎に、川上と川下とで殺戮し合つた。しかし、Q城の嶄新な武力は、終にS城を慘虐に壓倒した。

八

Q川がS川の水量を掠奪したと同樣に、Q城はS城を掠奪した。S城はQ城の藩屛として、Q城の直屬の家臣がその新らしい城主にされた。

此の横溢したQ城の勢力は、S川の流域で新らしい生命を產んでいつた。此れらの生命はSとQとの混種となつて汎濫した。從つて彼らS城を守る系統は漸次獨特の體系をとつて若々しく發達し始めた。

それと同時に、S城の市民はS川の復活を願ひ出した。彼らはQ城の城主に向つて、しば／＼S川の支流の石垣の撤廢を懇願した。しかし、Q城の城主はS城の勢力の擡頭を恐れねばならなかつた。S川が常に枯渇してゐる限り、S城は常にQ城の藩屛として苦しき忠實を守らねばならなかつた。さうして、Q城はその擴充された勢力と共に、次第にS城に對して横暴を極めていつた。

九

日月は經つた。北斗となつたペルセウスは、その天界でひそかにマンドロンダの星のために狙はれてゐた。

下界ではかの横暴なQ城の城主の勢力が、年々S城の市民を苦しめた。S城の市民の反逆心は地にひれ伏しながら鬱屈した。

しかし、Q城の横暴が、S川をせき止めてゐる堅牢な石垣と等しく續いてゐるとき、Q川の横暴もまた續いた。Q川はS川の水源を集めて貪婪になればなるほど、その尨大な浸蝕力は徐々として自身の河口にそれだけ高く堆積物を築いてゐた。此の堆積物はQ城の市民にとつては痼であつた。彼らの誇つた港灣は淺くなつた。海外の船舶は彼らの領土から隣國の港へ外れ始めた。

此の現象は自然とQとSとの二城を相殺さすことは明かなことであつた。

十

遂に、Q城の城主はS川の支流を止めた石垣の撤廢を命令した。何ぜなら、Q城はQ川の浸蝕力の運ぶ堆積物を調節しなければならなかつたからである。

S川は復活し始めた。Q川がその河口に高く堆積層のデルタを築いたそれだけ川の水流は緩漫になつてゐた。從つて、S川が再びQ川の水源を奪回するのは容易であつた。それにS川の渇れた川道は前から十分の準備を以つて開鑿せられてあつた。S川は日々の雨量と共に俄然として奔流した。それは恰もS城の市民の鬱屈してゐた反抗心に、着々として豊富な資力を注ぎ込んでゐるのと等しかつた。

S川の流域は豊饒になり出した。S城の市民は默々として産業の擴張をし始めた。生産物は増加した。通商が勃興した。さうして、彼らは暗默の中にQ城の支配下から獨立しやうとして活動した。

十一

QとSとの二川の浸蝕力は均衡を保つて來た。だが、Q川はその河口の堆積層の肌を、漸次に海面から胸のやうに擡げ出した。新らしい海岸平野は、古層の横に、モーバンを描きながら生れて來た。市街はそれらの段階デルタの上へ輝やかしく擴がつた。それと同時に、Q川の浸蝕力は益々緩漫になつて來た。

しかし、S川はそれとは全く反對の狀況を示し始めた。S川は曾ては前にその水源をQ川に掠奪されたごとく、今は逆にQ川の分水界の水線を奪ひ出した。浸蝕力は奔騰した。さうして、その河口の古層デルタの水平層へ二輪廻形の累層を新鮮な上着のやうに爽々しく着始めた。しかし、S城の市民は、Q城の市民が、その河口の活動狀態を忘れてゐる暇に、絶えずS川の河道の開鑿に注意した。

S城の勢力は勃然と擡頭した。Q城の市民は、自身を亡すよりも、S城を滅亡さす豫想の方が

より彼らにとつては幸福であつた。

十二

Q城の城主は瀟屏たるS城に對して再びS川の支流を堰き止めることを命令した。しかし、S城の城主は、今は斷乎として横暴なその命令を拒絶した。

Q城からは軍兵がS川の上流へ向つて進軍した。彼らは城守の意をもつて、再び石垣を築くために單獨の行爲をとつた。

それに應じてS城からは、直ちに軍兵が出動した。戰端が濃霧の中で開かれた。QとSとの河水は絶えず血液と油と屍とを浮べて流れ出した。

しかし、Q城の軍兵は純然たる王朝時代の殘黨から成つてゐた。從つて祖先を異にするS城の混種の軍兵よりもその團結力は强かつた。久しい二軍の接戰から勝ち得る者は、より强固な團結力の所有者に違ひない。Q城の軍兵は次第にS城へ攻め襲せた。さうして、Q軍は終に再び勝つた

十三

S城の軍兵はその粗大さの故に遂に破れた。しかし、Q城はS城からその生命の源泉であるS川の水を奪ふことは出來なかつた。何ぜなら、Q城の城主は、S城の市民の間に、彼らの必死の反抗心を育てることを喜ぶことが出來なかつたからである。

S川は依然として流れることを赦された。だが、S城の城主は反逆者として殺された。さうして、Q城の城主は、再びS城に新らしい城主を與へなかつた。かうして、S城の市民は永久に彼らからその反逆の武器を奪はれた。

SとQとの二城の鬪爭は斷絶した。S城は常にQ城の支配の下に鎭つてゐなければならなかつた。だが、城主の亡んだS城の市民の間では、ひそかに個人の經濟活動が分裂しながら繁しくなつた。商人がひとり財力を蓄積した。個人と個人の爭鬪が激烈になり出した。

しかし、Q城の城主にとつて、此の現象は喜ぶべきことであつた。何ぜなら、個人の爭鬪が激

しくなればなるほど、彼らはQ城に對する怨恨の團結力を鈍らせて行くにちがひなかつたからである。いかに個人が勢方を貯へたとて、一國の城主に勝てないことは分つてゐた。

十四

SとQとの二城の爭鬪が根絶されたときには、天下は再び王朝の勢力を挽回した。曾て彼らの國主を擔いで王朝に反抗した民衆は、今は彼らの國主を捨てゝ王朝を擔ぎ出した。封建制度が亡び出した。民衆は彼らの領主から解放された。領主は民衆の一人となつて蹴落された。

さうして、Q城の城主もまた、不意に彼の使役した一介の土民と等しい一線へ墜落した。

だが、此の急激な變遷にひとり利益を得たのは商人であつた。S城の市民はQ城のために久しくその武力を奪はれてゐた報酬として、彼らは商人となつて莫大な私財を貯へてゐた。此のためS城の市民の財力は、個人としてはるかにQ城の市民を凌駕してゐた。領主から解放されたQとSとの市民達は、突如としてその私財の多寡に從つて個人の權力を延ばし出した。

十五

S市はQ市を壓倒した。S市は私財を糾合した力に依つて、ひとり益々彼らの生産力を膨脹させた。彼らの生産が增せば增すほど、彼らの私財は增加した。彼らの私財が增せば增すほど、彼らの生産力は膨脹した。

今は、Q市はS市の勢力に對する唯一の防禦として、S川の閉塞を命令することは出來なかつた。彼らはただ貧しきままに、正しき傳統と品位とを誇らかに尊重してゐなければならなかつた。

しかし、S市の海岸平野の上には珍奇な工場が竝び出した。S市の市民は、その混種の粗雜さを以つて新らしき文化を建設し始めた。彼らには傳統はなかつた。彼らには因習がなかつた。彼らは新らしき祖先であつた。彼らは彼らの力のまゝに、その生産と財力とを擴張すればそれで良かつた。彼らは彼らの障害となる凡ゆる古き習性と形式とを破壞し始めた。彼らは自由であつた。彼らには拘束がなかつた。彼らは氣品と階級を蹴倒した。彼らは團結を憎んだ。彼らは個性を愛

した。彼らは分裂した各々勝手な情熱を以つて横に擴がつた。

さうして、S市の市民は忽ちの間にQ市の市民を併吞した。

十六

S市はその財力の豐かさを以つて、絶えずS川の開鑿を行つた。だが、Q市はその財力の貧しさの故に、絶えずQ川の堆積物を放任した。このため、Q川の浸蝕力の鈍るに從ひ、S川の浸蝕力はいつまでも增大した。S川の浸蝕力が增せば增すほど、ます〳〵Q川はS川にその河水を掠奪されていつた。しかし、S市の膨脹力はS川の膨脹力よりも激しかつた。今やS市の要求する河水は、S川の水量だけでは不足となつた。さうして、Q川は遂にS河を助けるために、初めてその支流を閉塞された。

だが、Q市民はS市民に向つて反抗することは出來なかつた。何ぜなら、Q市民それ自身、今はS市民であつたら。かくして、SとQとの市街は、爭奪し合つた二川のために一大都會となつ

て來た。」

十七

ＳＱの開析デルタの上には工場が陸續として建ち並んだ。鐵道の數は增していつた。Ｓ川の電力は馬力を上げた。船舶の帆檣は林立した。さうして、全市街は平面から立體へ、木造から石造へ。營舍が、官衙が、工場が、商店が、校舍が、劇場が、會社が、寺院が、橋梁が。ガラスと金屬の光波は絕えず空間で閃き合ひ、發動機の爆音と鐵槌の雜音とが潑溂として交錯した。

しかし、此の壯大な市街を構成したものは財力であつた。所詮ＳＱの市民は財力の下には屈伏しなければならなかつた。さうして、その財力の投資者であつた商人達は、ひとりますます民衆を使役した。市街は投資者の市街となつた。民衆の勞役は彼らのための奉仕となつた。自由と平等は彼らのために奪はれた。Ｓ川の河水は、徒らに彼らのために誇らしく流れてゐるのと等しかつた。

勞働者達は自身を使役する財力のために靑ざめ出した。彼らの疲勞はます〳〵彼らを苦しめる財力を助けることとなり出した。しかし、彼らは彼ら自身を生存させるその市街から逃れることは出來なかつた。さうして、彼らは彼らの勢力をもつて築き上げるその大市街が尨大になればなるほど、その大都會の全重力を彼らの肩に脊負つて行かなければならなかつた。そこで、初めて最も平等を重じたＳＱの市民達も、その各自の財力に從つて、必然的に階級が存在してゐることを意識し始めた。

十八

ＳＱ市の無產者達は團結した。彼らは彼らの勞力がいかに有產者達にとつて尊重せらるべきかを警告するために反抗した。

資產家達はその財力の權力を用ひて壓迫した。

無產者達は擡頭した。

一大爭鬪がデルタの上で始つた。
集團が集團へ肉迫した。
心臟の波濤が物質の傲岸へ殺到した。
物質の閃光が肉體の波濤へ突撃した。
市街の客觀が分裂した。
石と腕と彈丸と白刃と。
血液と爆發と喊聲と悲鳴と咆哮と。
疾走。衝突。殺戮。轉倒。投擲。汎濫。
全市街の立體は崩壞へ、――
平面へ、――
水平へ、――
沒落へ、――

色彩の明滅と音波と黑煙と。
さうして、ＳＱの河口は、再び裸體のデルタの水平層を輝ける空間に現した。
大市街の重力は大氣となつた。
靜かな羅列は傷つける肉體と、歪める金具と、搔き亂された血痕と、石と木と油と川と。

表現派の役者

一

歩道の敷石が曲つて來た。寒い。建物の影の中へ踏み込んだのだ。馬車が通る。鞭の革が蔓のやうに閃いた。硝子の中でひとり娘が笑つてゐる。街路樹の葉が邪魔だ。空では建物の石線が斬り結んでゐた。

『あなた、馬のやうね。』と綠は云つた。

『靴が破れやがつた。』

『馬のやうだわ。』

『何が？』

『ぽかぽか歩いて。』

『靴が破れたよ。』

『そんなに、荒つぽく歩くからいけないんだわ。』

『花でも差してくれ。』

『もう花屋は過ぎたわね。』

自動車は蟹のやうだ。窓硝子が光つてゐる。ピストルを一挺と靴を一足買はねばならぬ。綠にはボンピアン・マツサージ・クリーム一つ。白癬が出來てゐる。二人は街を曲つた。日光が面を叩いた。明るい歩道の上で綠の白足袋が塵埃をつけた。俺の首は、オバーの襟から延び上つた。待て、俺は何んだか素敵なことを考へてゐたではないか。

『あなた、今日叩くとき、そつと叩いてね。昨日のは痛かつたわ。』

『その代り、接吻するときにや。』

『いやだわ。』

『こんな稽古の時には、その方がいい。』

『澤山。』

『白癬を癒しといてくれないと、困るね。』
『ほんとにね。冬が來ると、いつもかうなの。私、冬はいやだわ。そりや、荒れ性なのよ。』
『冬か。』
『あなたもお厭？』
此の街路樹も葉を落すのだ。道がからから鳴つて、あの窓に北風が吹きつけるのだ。
『いやだね。』
『夕べ海岸通りを歩いたの。寒かつたわ。』
『ひとりかね？』
『ええ。ピアノを習ひに、行き始めたの。』
それで昨夜は來なかつたのだ。いや、嘘だ。誰かに白癬を傳染(うつし)に行つたのだ。あのブルジョアの親爺めに。幾ら貰つた？ ああ、俺は、此奴を愛してゐる！ 金を借せ。敷布團から藁が喰み出してゐたぢやないか。

『もう三時ね。遅いかしら？』
塔(タワー)の時計は眞直ぐだ。タールの匂ひが街角から流れて來た。馬の頭が踊つてゐる。少女の胸が三つ竝んで迫つて來た。パンクの音が。自轉車だ。靈柩車の硝子に、俺の凹んだ顏が映つて行つた。
『氣狂ひのやうに、見えるかね。』
『あなた？』
『うん。』
『いやだ。』
白中に、俺はいきなり惱んでゐるではないか。鳥も食へない。おお。俺は愛してゐる。自轉車にでも乘せてくれ。誰も彼もひつ摑まへて、「俺は、俺は、俺は。」と云ひたくなつた。
『ショウインドウの人形にでも、屆つてくれないかね。』
『お金がなくなつたの？』

『海岸通りでも、歩いてみたくなつたよ。』
『まア。』
『何が、まアだ。』
『また疑ぐつてらつしやるのね。』
『分つたかね。』
『ほんとよ。私の音量、三オクターブもあるのよ。先生が賞めたわ。』
　それがあの親爺に白癬を傳染さなかつたと云ふ證明か。俺は世界の隅から隅まで、白癬の出來しゐる奴を捜し廻るぞ。綠は指先を、ぴんと擴げた。
『これが、一オクターブの指勢なの。私、ピアノを欲しいわ。』
『買つて貰ふといいね。』
　睥むな。なほ嘘つきになるではないか。
『俺にも白癬が出來ただらうね。』

『あなたは、綺麗なお方だわ。』
　油ぎつた親爺よりか。親爺の白癬と、俺の白癬とは兄弟だ。美聲が通る。あの煙草は、美味さうだ。もつと澄して、ひつくり返れ。
『やいッ。』
『どうしたの？』
『あの聲に、云つてみたんだよ。』
『馬鹿にぴんとしてるわね。』
『好きかね。』
『運命でも判斷しさうな聲ね。』
『なかなか豪さうな奴だね。あ奴は。』
『あなたの歩くのは、早くつていやよ。』
『ああ云ふ種類の聲には、得て、白癬がひつ附いてるもんだ。』

『私、何ぜから草臥るんでせう。直ぐ疲れちやふのよ。』

『茶を飲みたいね。』

『私、お金を持つててよ。』

『無論。』

『ね、お茶を飲まなくつて？』

ああ、また今日も、此の女を叩けるぞ。廣告のビラが出てゐる。俺の名前は三字である。青い。まん中だ。出世はいつだ！

『今日は一寸強く叩いてみるよ。』

『いや。』

『實感が出さうだ。』

『いやよ。』

諸君。見てくれ。後二日だ。俺は此の女を諸君の前で叩いて見せる。俺の實感に拍手を送れ。

金を出せ。酒を飲ませ。此の女はソツと金を貰つてゐるのです。白狀しないが、俺も金は欲しいのだ。ショールが通る。俺は葬禮と突き衝つた。今日は二度目だ。

『誰が死んだのでせう。』とも綠は云はぬ。

『君の白粉はいい匂がするね。』

『そうお。』と綠は喜び出した。

『好きだ。』

『あなた、白粉の匂ひを嗅ぎ分けられて？』

『君のお陰だね。』

『私には分らないの、鼻がつんぼね。』

『耳もつんぼだ。』

『だつて。』

『葬禮め、早く行けツ。』

『綺麗だわね。』
『何が。』
『あの車に乗るのは、高いのよ。』
『俺でも乗るよ。』
　絲は黒い柩車の硝子に顏を映して髮の形を直してゐる。うまい。あの親爺が死んだとき、忘れるな。俺のときも。
“Oh（オー）, my（マイ） heart（ハート） broken（ブローケン）!”
『どうしたの？』
『俺は捨てられた、と云ふ意味だ。』
『また始まつた。いやよそんなこと、私、またきつく叩かれるんだわ。』
『もう叩いたつて、駄目だよ。』
『ね、ソツとよ。』

『海岸通りを今夜も通るんだね？』
『行かうかしら。』
『行くがいい。一オクターブの指で、儲けて來てくれ。』
『私、ほんとにあなたが豚になつた。』
　下水の吐け口が、石垣の横腹でまん圓い。橋の下では小舟の帆檣が歪んでゐる。あの舟は水が欲しいのだ。起重機が泥を咬んだ。
“Oh（オー）, my（マイ） heart（ハート） broken（ブローケン）!”

二

　樂屋の襤褸切れが片足にひつ附いた。扉のハンドルがねばねばする。ぐつと開けると兎慈が眇目（すがめ）をして俺を見てゐた。
『おい。』

『おい。』
どこを見てるんだ？　俺の顔が彼には二つに見えてゐるにちがひない。これはうるさいことを云ふ前徴だ。
『鼻の角度が二十六度だとすると、君？』
兎慈は言葉が詰つて口を開けてゐる。
『今日は眇目だね。焦點が二つある。』
『鼻の角度が、二十六度だとすると？』
『諦めたものさ。』
『光波の屈折が、視角の十度を奪ふのだ。してみると、額の投影力が？』
『表現派は眇目で突進するのに限るのだつて。』
『俺は、まだ科白をたつた三つ覺えたきりなんだ。』兎慈は素面になり出した。
『失敬。』

『おい、夕べ、俺は惱んだよ。』
『失敬。』
『例の……』
階段が二つに見えた。眇目を俺は傳染された。地下道の暗さの中から、結城はマントに女を包んで昇つて來た。
『寒いわね。』と女は云つた。
『寒いかね。』
『緑さんは？』笑ひもしない。
『寒いよ。俺は。』
『行くよ。』と結城は云つた。
『二人でかい？』
『まア、默つて見てゐてくれ。』

塗喰の上を紙片が默つて辷つて來た。女が頭の上で笑ひ出した。「ヤツ、」と人が石を擔いだ。貨物自動車が傾いて停つてゐる。子供が欲しい。綠は石女の骨盤だ。通りへ出ると悲しさがなくなり出した。ああ、神聖な空よ、家よ、犬ころよ、巡査の箱は綠である。男が牛の太股を冠つて店へ這入つた。

『兎慈さんがあなたの悪口を云つててよ。』

綠が横に立つてゐる。俺は歩き出した。すると、また悲しくなつた。

『口惜しいわ。』

『その調子だ。』

『何にが？』

『君は美しい。素敵だよ今日は。』

『待つてて下さつたの？。』

『見れば分る。』

自動車が一束のビラを綠の肩に投げつけた。綠は散らかる數百枚のビラの中でよろめいた。

『失敬だわ。』

『失敬だ。』

『ほんとに、びつくりさして。』

『廣告になるね。』

『兎慈さんは、あなたのことを策士だつて。』

『賛成してくれ。』

『だつて、私、腹が立つたわ。』

『奴の鼻は、二十六度あるので、高い。』

『さうよ、鼻が高いわ。』

『俺のは低すぎる。これぢや、科白がいくら上手くつても駄目だ。』

『これから歸つて何をさなるの？』

『鼻の高さでも計るかね。』
『私、金歯を入れなきやならないわ。』
『僕はね……。』
『何に？』
　俺は何を云はふとしてたのだ？　忘れた。淋しさが詰まり出した。「とにかく俺の神經は實に崇高なものを求めてゐるんだ。」
『もう暫く雨が降らないわね。』
『崇高なものとは、實に素張らしく崇高なものなんだ。』
『もう、あなたは、私がいやになつたんだわ。』
『あの倉庫は、實に威張つてゐるね。』
『知らない。』
『おい、俺は何を悲しんでゐるのか、敎へてくれ。』

『狂人ひだわ。』
『全く悲しさでいつぱいなんだ。』
『いやだ、いやだ。私、此の一週間、あなたに虐められ通しよ。』
『とにかく、苦しんでゐると云ふことは、苦しいんだ。』
『あなたが勝手に苦しんでゐらつしやるんぢやありませんか。』
『はてな、俺は、こりや、腹が空いてるんだぞ。』
　緣は俺の顏を見詰めてゐる。ああ、朝が來れば、俺の悲しさはなくなるだらう。俺は豪いぞ、と叫ぶだらう。それだのに、夜が來れば、俺は藥壜のやうに見えて來る。
『君、君、僕は何んだか、喜ばしき一つの情緒が足りないね。』
『何を云つてらしやるの。』
『喜ばしき情緒が足りない。つまり。』
　俺は悲しんでゐるんだ。

『悲しみの飛躍が、馬のやうだ。』
『私、どうすればいいの。』
綠は泣き出しさうな顏をして見せた。
『それが分らないんだよ。』
『ぢや、私、あなたと死ぬわ。』
『なるほど。』
『何がなる程なの。』
『忘れた。』
何にかないか、何か。何とは何の象徵だ。
『崇高なものだ。』
『どうなすつたの。』
見よ、俺の愛は絕體だ。絕大なる愛の中を、四角な顏が、自轉車が、ステツキが。こりや俺は

狂人だ。夕刊賣が倒れかかつた。
『どつこい。一枚くれ。』
支那の戰線が崩れ出した。獨逸の內閣が瓦解した。英國の勞働黨が負け出した。ムツソリニが威張つてゐる。俺は舞臺の上へ飛び上るのだ。綠をひつ叩く科白はかうだ。
『犬め、猫め、豚め、正義の色は、貴樣の淫蕩の血に穢された！』
かう云ふ芝居は贊成しない。俺のやうに昂奮したつて、世界は動くものではない。陰險な毒牙は休んだ時計のやうに落ちついてゐるものだ。
『ぢや、さやうなら。』と綠は云つた。
『何んだ。』
『今晚は行かないわ。』
『分つた。』
『さやうなら。』

『しかし、一寸話したいことがあるんだがね。』
『何アに。』
『結婚をなるだけ早くしたいんだよ。』
『何を、そんなに笑つてらつしやるの。』
『君の眼がいけないよ。』
『どうして。』
『俺に金がないと云ふことを洞察してる。』
『あら、だつて、あなたにはお金がないわ。』
『あればどうする。』
『なくつても、よくつてよ。』
『ぢや、ともかく、今晩は來てほしい。』
『今晩、私、困るの。』

『來てくれ。』
『さやうなら。』
『來てくれ。』
『また私、虐められるだけなんですもの。』
『我慢してくれ。』
『いやよ。』
『失敬。』
『一寸。』と緣は呼びとめた。
『何だ。』
『行かなくつてよ。待たないでね。』
『駄目だつて。あの親爺は、いつまでもお前を愛しやしないよ。』
『知らない。』

『お前の觸角は間違ひ通しだ。いい加減に、あの親爺を突つ放して了ふがいい。』
『あの親爺つて、誰のことなの。』
『何んでもいい。ピアノを擔いで歸つたら、叩いてやれ。』
『私、あなたのことなんか、もう何んとも思つてなくつてよ。』
『いや、とにかく、一緒に死ぬ筈だ。そんなことなんか、どうでもいい。』
『あなたは何んでも勝手だわ。』
『勝手でないから怒るのだ。』
　失敗(しま)つた。綠の脊中が歩いて行く。悲しみの情緒が天空まで染まり上つた。よしッ。俺は彼女の後を追跡してやるぞ。乞食が杖を持つて慄へてゐる。無踏病者だ。憐れな者はより憐れな者を見るのが良い。俺を愛する者は誰か。誰だか俺を今非難してゐる奴がある。散歩者が來た。あの眼は姦淫しながら歩いてゐる。今幾人の個性が俺のポーズを眞似してゐるか。所が、諸君、俺はいつぱいのライスカレーが欲しいのだ。

『あら。』綠は振り返つた。
　驚いては嘘が剝げるぞ。
『どこへいらつしやるの。』
『君の行先を追跡したくなつたんだ。』
『ぢや良かつたわ。』
『いいのかね。』
『ええ、私、今夜あなたの所へ行かうと思つてたんですもの。』
『やつたな。』
『もう行かなくてもいいでせう。』
　俺は默つて引き返した。
『ね。』
　何だか後で云つてゐる。聞いたが最後、負ける種類の言葉に相違ない。ともかくも、街には火

が點いた。舞踏病者の歩みは一時間に十歩である。運河(キャナル)の水に月が映つた。月見をしてゐるのは乞食である。美女が威張つて香氣を撒きながら通つて行く。上には上があると云ふ方則を感じたとき、咬みつく顔だ。ああ神よ、願くば我をして最上の美男たらしめよ。然らば、我は爾に感謝するために、最高の道士とならう。俺の顔が映つてゐる。街衢のガラスは人類に客觀性を與へて來た。大都會の一偶に存在する俺の姿があれだとすれば？　人々よ、輕蔑してくれるな。俺でも長い傳統をひつさげて現はれたのだ。歴史の頂上の一點だ。諸君、此の一點がいかなる人類未聞の一ポーズを展開するか、見てゐてくれ。だが、俺の心の軸を廻してゐる奴は、俺ではないぞ。それなら誰だ？　誰だ？　誰だ？　英國の勞働黨は負け出した。支那の戰線が破れて來た。殺人光線が發明された。俺の脚は脚本の上を、走り廻るだけなんだ！

三

俺の部屋の窓からは海が見えるのに、梯子は暗く鳴るではないか。俺は積つた紙屑の間を渡つて坐り込んだ。一日の疲勞は俺を窓際へも寄せつけない。

手紙が來てゐる。町子？　何故女の手紙は疲勞をかくも吹き拂ふのか。だが、此の名は俺には初めてだ。十一日の夜の八時に來いと書いてある。M公園の池の傍だ。

『私はどれほどあなたをお慕ひ申してゐましたことか。』

新時代の女の誘惑法は、かうである。古臭い。だが、何ぜこの文句は、こんなにも新鮮なのか。待て、十一日とは今夜である。今夜は緣と俺は逢はねばならぬ。だが、何ぜ急に緣がこんなにも古くさく見え出したのか。昨夜、待ちぼけを食はせた奴は緣である。今夜食はせる番は俺なのだ。いかに俺の純心な愛情は緣を增長せしめたか。いかに緣は俺の純心な愛情をうるさがつたか。緣をうるさがらせないが爲に、尙緣を愛する行爲として、俺は公園の町子の傍へ行かねばならぬ。緣の理屈は、勝手に緣の方でつけるが良い。眞理は理屈と理屈のギャップから生え上るのだ。さて、

『私はどれほどあなたをお慕ひ申してゐましたことか。』

フツトライトに照らされて、「犬め、猫め、豚め、」と叫んだとて寄りつく奴は蚤だけだ。

太陽が羽蟲を煽動させて沈んで行く。海を望んで一日に一度は咏嘆する此の窓へ、ハムレットよ、今日は來て俺の代りに蚤に食はれてくれ。あの綠は俺の留守に來るだらう。ひとり默つて紙屑の中に坐つてゐるにちがひない。

『ね、あなた、ネクタイをお取りかへなすつたら。』と綠はここで云つたことがある。

しかし、それがどうしたのだ。彼女がピアノを一臺稼がうとしてゐる暇に、俺は何故俺の貞操を切り賣りしてはいけないのだ。苦痛を與へる者に、いかに苦痛が苦痛であるかを敎へてやる手段として、苦痛を與へてやると云ふことが、法律なのだ。まだ他に理屈がないか。良心の騷ぎを押へるには、確乎として平凡な理屈に限る。――

幸福が來たんだ。長い苦痛を破つて出て來た月のやうに。あの公園の中に俺の幸福がこつそりと潛んでゐやうとは！　幸福と云ふ奴は、どう云ふものか。だが、幸福さうに見えると云ふことは、いかにもきらきらと幸福なものではないか。

『私はあなたが舞臺にお立ちになつてから、まだあなたのお姿を見脫したことがございません。あなたのお名前が街々の店に出ましたとき、私の胸は慄へるのでございます。』

公園へ、町子の傍へ。綠よ、俺の胸は此の通り輕快だ。嘘をつかぬ。再びお前の前に立つたとき、俺の顏はお前が一番俺を好きだつたその頃の、俺の顏のやうに生々となつてゐるだらう。だが、お前に貰つた此のネクタイだけは借りて行く。お前に美しく見せんがために磨かれた此の顏が、今頃町子の手を握るのに役立つやうになつたとは！　俺は實は淋しいんだ。

『まア、今日はあなた、お綺麗だわ。』とお前は俺の寢足りた日に嬉しさうによく云つた。

だが、だが、俺は行くぞ。今頃俺を淋しがらすと云ふことは、これは先祖の良心だ。俺の良心は、お前を蹴りつけよと叫んでゐる。綠よ、悲しんでくれるが良い。お前をかく悲しますと云ふことは、俺が町子に逢ひに行くのと等しいだけに俺にとつては幸福だ。もしも俺の幸福感が知りたいなら、お前はこつそりお前の悲しみの量を計るが良い。

四

二頭馬車でも要る夜だ。街の公路が公園の森の中へ胸のやうに登つてゐる。人々は靄の中を泳いでゐた。靴の底で俺の靴下の破れてゐるのを誰も知るまい。だが、顏は此の通り剃り立てだ。公園へ行きつくまでは脂肪だけでも遠慮してくれ。役者は脂肪顏は嫌ひである。月のあるのを忘れてゐた。マドロスパイプは煙を出さぬ。その蓄音機はもう聞き倦きた。此の足が古い舞踏をやり出しては困るのだ。さて、かくステッキをくるりと廻して、幸福へ。幸福とは明るい夜にステッキの輕さを感じることだ。公園の女は、今頃は油取紙を二十枚も使つてゐるにちがひない。ああ愛された男よ。お前のステッキはまア何と今夜はよく廻るのだ。人の頭だけは氣をつけよ。胸よ鳴るな、臺詞を忘れて愛の言葉が鸚鵡のやうに詰まり出したら、

『僕は、僕は、何と云つていいのかどうぞ。』

『まア、あなたはさう云ふことが、お上手でいらつしやるのぢやございませんか。』

『いゝえ、僕は、此の通り日頃の練習も忘れて了ひまして。』

『あら、氣の弱いお方ですのね。私はまたあなたほどお達者な方はゐらつしやらないと思つてゐましたの。』

『所が實は、昨夜、綠の肱が此の胸にあたりましたほどなので。』

『綠さんの言葉には實感が缺けてをりますのね。』

『それはその筈なんですよ。目下あれはブルジョアの親爺めに實感を應用さしてゐるのです。』

『ぢやあなたは？』

『此の通り。』

『實感が少しもございませんのね。』

『あなたは舞臺と事實とを混同してお考へになつてゐるんです。そこが僕らの生活の一番不幸た所です。』

これは弱つた。公園のベンチが早や月に光つてゐるではないか。愛の實感を出せば出すほど、女は嘘と思ふだらう。男が一人紙屑を財布と間違へて拾つてゐる。だが、町子はどこにゐるのか。マドロスパイプに火を點けるのも早や過ぎる。ひとり澄してゐても喜ぶのは月だけだ。今夜の月

も兎が横になつてゐる。哲學者も戀をしたとき云つたぢやないか。

『ああ、私の見てゐる此の月を、今夜は彼女も眺めてゐるにちがひない。』

俺も何とか一言云はねばならぬ。溜息はこれからつくとこだ。

『待ち給へ。』

池には水草が浮いてゐた。媾曳をするのはこの俺だけだ。町子、早く來てくれ。あまり此の胸を慄はしてはお前に逢つても役に立たなくなるだらう。八時と云つたが時計がない。月の傾きを見よとは云ふな。この種の媾曳はまだ三度目だ。ああ、俺のステツキはもう廻らない。石でも叩け。俺は馳け出しの豪の者だ。

女が池の岸に添つて歩いて來た。マドロスパイプが慄へ出した。マツチは何處だ。いや、舞臺で俺はこんな態をしなかつた。思ふに町子は俺の舞臺姿より知らない筈だ。これほど俺が何に食はぬ顔をしてゐると云ふことは、この靜な池がこれほどぐらぐら煮え返つてゐるやうに見えるからにちがひない。待て、これは不思議だ。あれは綠だ！　やられた！　愛の試驗だ。先手を打たれた。俺を落第さしてあの親爺に乗り移らうと云ふ腹だ。俺は俺から綠の方へ近寄つた。

『隨分待たせたね。』

『だつて。』と綠は足先で土を蹴つた。

『お前は喜んでゐるだらう。』

『どうして？』

『俺がかかつたと思つてるんだらうね。』

『どう云ふ意味なの？』

『お前の仕業だ位ゐ、知つてゐるんだよ。』

『さうぢやないわ、私、誤解されちやいやだわ。』

『お前の手は、極めてはつきりしてるよ。』

『私ね、もう隨分長い間、あなたと媾曳したことがないでせう。』

『毎日してたぢやないか。』

『違ふわ。私、もつと新らしく、初めのやうになりたかつたのよ。』
嘘をつけ！　だが、かかつた以上もう駄目だ！
『さて、どうしやうつて云ふんだね。』
『どつか歩きませうか。』
『いや、お前の試驗の結果はどうなんだ。それが訊きたいね。』
『試驗つて何のこと？』
『お前は、俺を試驗したぢやないか。』
『まア、そんな風に見えるのね。』
『それはどう云ふ心理の説明なんだ？』
『そんなこと、知らないわ。』
『お前はあの親爺（おやぢ）から、俺を捨てよと云はれたのだらう。』
『どうしてあなた、そんな解釋をなさるの？』

『町子と云ふ名にひつかかつて、俺が出て來たことになつてゐるぢやないか。お前が俺を捨てるのに、こんなに都合のいいことはないだらう。』
『ほんとね。』
『何がほんとだ！』
云ひ過ぎた。こちらが説明してやるやうではないか。だが、待て、もうここまでくれば、こちらが説明してやるに限るのだ。
『俺もお前がそれほどひどい奴だとは、思はなかつたよ。』
『私もよ、私、あなたがこんな方だとは思はなかつたわ。』
『ぢや、いよいよさうだね。俺はお前の手に乘つてをいて、良かつたよ。』
『私も良かつたわ。』
『俺はお前がもしかしたら、そんなつもりぢやなかつたんだらうと思つてゐたんだ。それで、俺も來てみたんさ。しかし、實にお前は惡辣な奴だ。』

『私はさう云ふつもりではなかつたのよ。そりやもう、どう解釋されたつて仕方がないわ。だけど、私、あなたともう一度こんな媾曳をしてみたかつただけなのよ。』

『それなら、何ぜあんな名前を使つたんだ？』

『だつて、あなたはもう私を嫌つてらつしやるんですもの。私の名前で書いたつて、あなたはもう來て下さらないわ。』

『そんなことが分つてるなら、俺がお前に、俺の所へ來てくれつて頼むのだつて分つてる筈だ。』

『あなたは、口がお上手だわ。』

『お前は手がうまい。』

『私、あなたのことだから、こんなことを私がしたつて、知つてらつしやるにちがひないと思つてゐたわ。』

『それで、實はどちらだと思つてるんだね。』

『そりや、あなたは、ちやんと知つてらつしやつたんでせう。』

『俺はまだ、それほどお前を惡辣だとは思つてゐなかつた。』

『私はまた、こんなことをしたら、きつと前のやうに、二人がよくなるだらうと思つてゐたのよ。』

もう最後だ。なるだけ上品なことを云つてくれ。

『ぢや、今でもまだ良くなると思つてるんだね。』

『ええ。』

『俺は町子と云ふ女と媾曳をしやうと思つてたんだ。分つてるかね。』

『ええ。』

『それでもお前は、いいと云ふんだね。』

『ええ。』

『お前には町子と云ふ女がお前だと分つてゐるからね。』

『私、あなたにどうされたつて、いいと思つてるのよ。』

『俺にもさう云ふことをさしてをけば、お前にも都合が良いと云ふのは、そりや分る。』

『あなたは、そんなことばかり考へてゐらつしやるのね。』
『さうでなければ、こんないたづらは出來るものぢやない。』
『私には出來るの。私、あなたがもう私を愛してゐて下さらないと思つてるから、どんなことだつて出來るのよ。』
『愛してゐたらどうする？』
『だつて、もうあなたは、さうぢやないわ。』
『いや、お前があんないたづらを平氣でやつてのけたと云ふことが、もう俺を愛してゐないと云ふ證據だ。失敬。』
『一寸。』
『まだ入用なんかね？』
『ええ。』
『何だ？』

『私を町子だと思つて下さらなくつて？』
『もう嬲るのも、いい加減にしといてくれ。』
『ぢや、もうこれで駄目なの？』
『何ぜそんなことを云ふんだ。』
『さうぢやありませんか。』
『そりやさうだとも。』
『私、あなたのこんな所を見たら、もうあなたにこれから虐められなくつてもいいと思つてるの。』
『そりや分らないよ。』
『虐められたつて、私、もういいわ。あなたにもそんなことがあるんだと思ふと、私、虐め返してやれるわ。まだ、私あなたを一度も虐めたことがないんですもの。』
『お前は一體、それで俺を思つてゐてくれるのかね。』

『さやうなら。』と不意に絲は云つた。
失敗つた。こちらから先手を打つて歸るのだつた。
『歸るのか。』
『ええ。』
『一寸。』
絲は默つて振り返つた。
『もう逢はないと云ふんだね。』
『さやうなら。』
なる程。後足から砂を跳ね上る。俺の顏はどう云ふ顏か。犬め！　猫め！　豚め！　よし。それなら一つ、俺は馬鹿になつて見てやらう。
『おい。』
俺は馳け出した。俺は絲の片手を摑まへた。

『どうなさるの？』
『月夜だね。』
『いい月だわね。』
『もう一度、前のやうになつてくれないか。』
『此の坂で、いつか私、鏡を拾つてよ。』
『歩いて見るかね。』
『ええ。』
二人は歩き出した。鬱憤とはかやうに靜なものだ。
『前のやうとは、お前も俺を愛さない、俺もお前を愛してゐない時代のことなんかね？』
『どちらなの？』
『だから訊くんだよ。』
『どちらだつて、同じらしいわね。』

『俺もそんな氣がするんだ。』

『だけど、初めから、かうだつたやうな氣もするわ。』

『お前らしい。』

『此の坂は、危くつてよ。』

『仲が良ささうだね。おい、結婚してくれないか。』

默つてゐる。相手が結婚してくれないと分つてみれば、何ぜ、此のやうに出鱈目が云へるのか。俺は面白くなり出した。瞞され甲斐があるではないか。

『ね、結婚してくれ。俺は今夜、町子がもしお前でなくつて、誰か他のブルジョアの女だつたら、そ奴を瞞して、お前にピアノの一臺位ゐ買はふかと思つてたんだ。分つたかね。白狀するが、それほどつまり、俺はお前を思つてゐたんだよ。』

『あなたも上手いわね。』

『信用出來るだらう。』

『だから、私にもあなたのものを買へと仰言るんでせう。』

『うん、さう云ふ傾向も、一癖あつて面白いよ。』

『ピアノでも買つて下さればよ。』

『うん、所が、町子はお前だつたんだ。どうだね、一臺ピアノでも買ふ金をくれないか。近頃は餘程金が這入るだらうね。』

『ええ、這入つてよ。だけど、私、たつた一つ心配なことがあるの。』

『それはいいね。』

『私きつと明日からきつく叩かれるわ。』

『そんな心配があるなら、俺と結婚してくれてもいいぢやないか。』

『いやだわ。町子さんでも出て來れば、あなたは私を捨てて行つて了ふぢありませんか。』

『所が、それがお前のためだ。』

『あなたと結婚すれば、あなたはきつと、仕返しをなさるに定つてるわ。私、何もしないんだけ

ど。』

『仕返しされる柄でもなからう。』

『ぢや、あなは本當に、私と結婚して下さるおつもりなの？』

『お前はどうなんだ？』

『あなたさへ良ければ、そりや私だつて。』

『すると云ふのか？』

『ええ。』

俺に結婚する氣がなくなつたと見てとると、直ぐからうだ。

『よし、だが、お前は今だつて、一日に三度位ゐ結婚してゐるぢやないか。』

綠は默つて睥み上げた。

『さやうなら。』

『うむ。しかし、一言(ひとこと)云つとくが、お前はもう直ぐ婆さんになるんだよ。』

俺は池の傍を蹴りつけて引き返した。母親に手を曳かれた男の子が、躓きながら眠たさうに歌を唄つてゐた。

『蛙が鳴くから。』

『歸へろ。』

俺は公園の石段を降りて來た。胸はひしやげた箱のやうにからつぽだ。はしやいでくれたステツキよ。俺と一緒に街を廻れ。俺はぐるぐる同じ街ばかりを歩き出した。電氣廣告は舌を出して頭の上で笑つてゐた。人波は露店に詰まりながら流れてゐる。俺の足はどこへ行くのか。人の流れに聞いてくれ。俺も一緒にいつまでも廻るだらう。音樂師のバイオリンが俺の腹を突き飛ばした。俺の片手はポケツトの底で、しきりにマツチの軸木を折り倒す。あれは何か！　さかさまに花嫁が擔がれて行くではないか。人波の頭の上で、花嫁の亂れた裾から二本の足が反り上つた。街道の人波は停止した。俺の胸は躍り出した。俺は人々の肩を突き飛ばして、花嫁の後を追つ馳けた。

『人形だ！』

『人形だ！』
『人形だ！』と俺も云つた。
花嫁姿の人形が藻痒きながら揺られて行く。俺は口を開けたまま突つ立つて眺めてゐた。すると、また絲に逢つた。
『やア。』
『まだ？』と絲は云つた。
二人はそのまま行き過ぎた。何がまだだ？　俺が瞞されて歸つても、泣いてくれるのはあの暗い梯子だけなんだ。俺の親父は、酒を飲みすぎて死んだのだ。阿母は親父の殘していつた狐の首巻ばかりを、今もぢつと眺めてゐるだらう。所が、息子は表現派だ。池の傍で、マドロスパイプを喰はへたまま瞞された。だが、明日の朝、朝日が出れば、
『俺は豪いぞ！』と叫ぶだらう。
俺の肩を叩くものがゐる。俺は振り返つた。と、絲が俺を睥んでゐた。

昭和二年一月十日印刷
昭和二年一月十二日發行

版權所有

春は馬車に乘つて
定價　一圓八拾錢

著者　横光利一
發行者　山本美
東京市芝區愛宕下町一丁目一番地
印刷者　稚名登
東京市芝區田村町十四番地

發兌　改造社
東京市芝區愛宕下町一丁目一番地
振替口座東京八四〇二番
電話銀座四五五八番
電話銀座一七三三番

二葉印刷所印刷

P317 DET

文學博士 幸田露伴著

幽秘記

內容

運命・眞眞・師師・樓船斷橋・
水殿雲廊・共命鳥・一枝花・泥人・
玉主・碧梧紅葉・狂濤艶魂・金鵲鏡・
桃花扇・幽夢・

菊判上製
定價二円五十錢
送料二十四錢

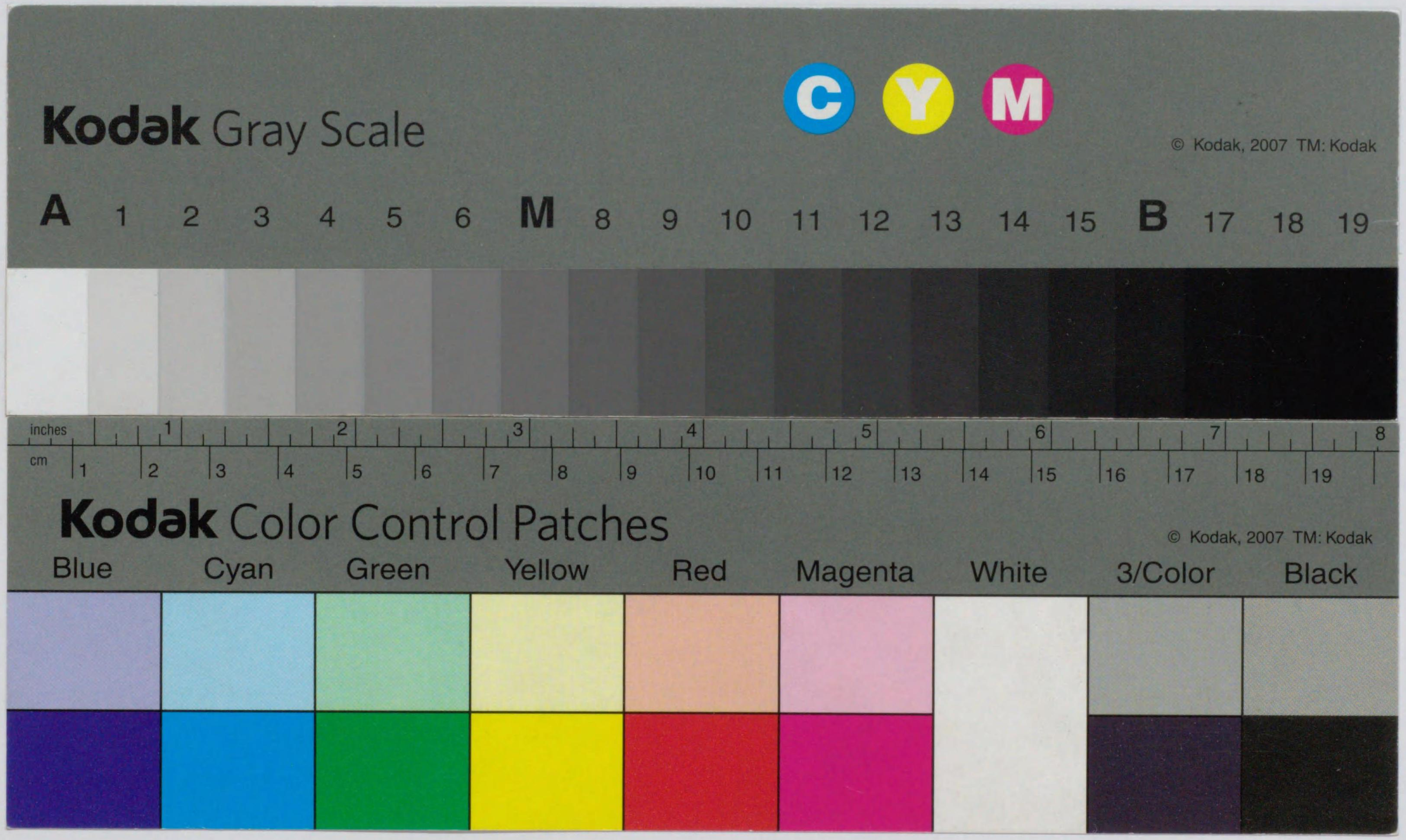
蒲生氏鄉・平將門

菊判上製
定價二円
送料廿二錢

賴朝・爲朝

菊判上製
定價二円
送料二十二錢

517
600


Kodak Gray Scale
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black